

江戸名所図會

十九

西垣文庫

文庫10

6556

19



文庫10  
6556  
19

三園橋社

小梅村田の中あり

梅田中橋

別當ハ天台宗延命寺と

号之神像ハ弘法大師の作す同大師の勸請ありとあり文和

年間三井寺の源慶僧都再興之慶長の頃迄ハ今の地より南の方

あり一飯後此地に移せし當社の内陣ハ英一蝶の畫あり牛若丸と

辨慶り羊身の圖を掲げし

五元集 牛嶋より今の神前より西をす

今の神前より西をす

夕立や田をとりたるの社あり

宝番舟

其角

あつた田あり

社僧云元禄六年の夏方ハ早懸とあり六月の廿八日村民ありて神前より西の  
所迄其日其前由當社より詣りてはひ一人の中に白雲とありて其前より西の  
所より西の農民よりありて一石を連ねて當社の神前より西の所に日膏あり  
今も為社に傳へあり

牛御前王子権現社

同所北の方あり

別當ハ最勝寺と号之牛嶋の

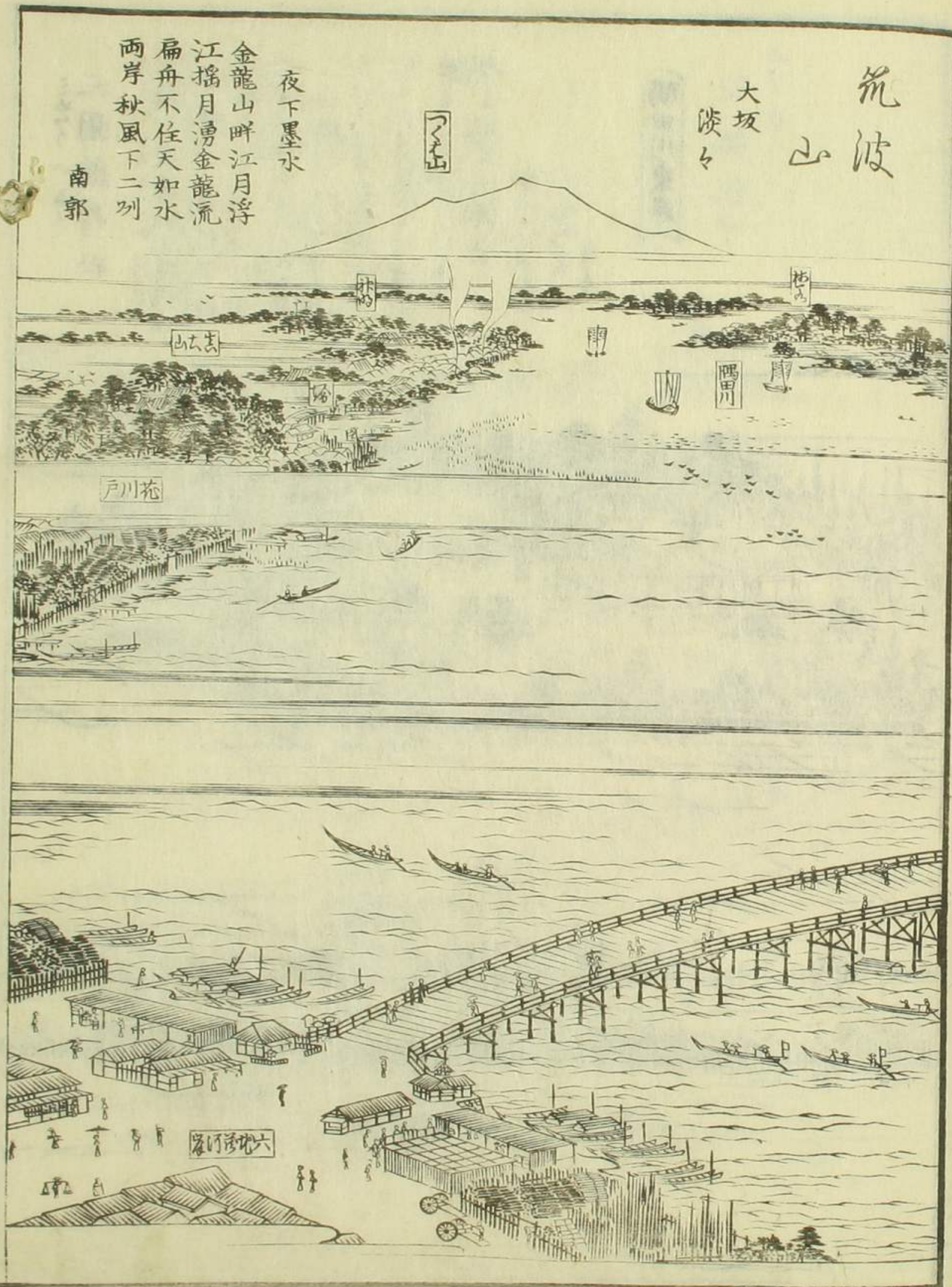
總鎮守とて祭禮ハ隔年九月十二日北本所石原新町の旅所ハ神

幸ありて同十五日小帰興と祭神素盞鳥尊牛御前清和天皇第七



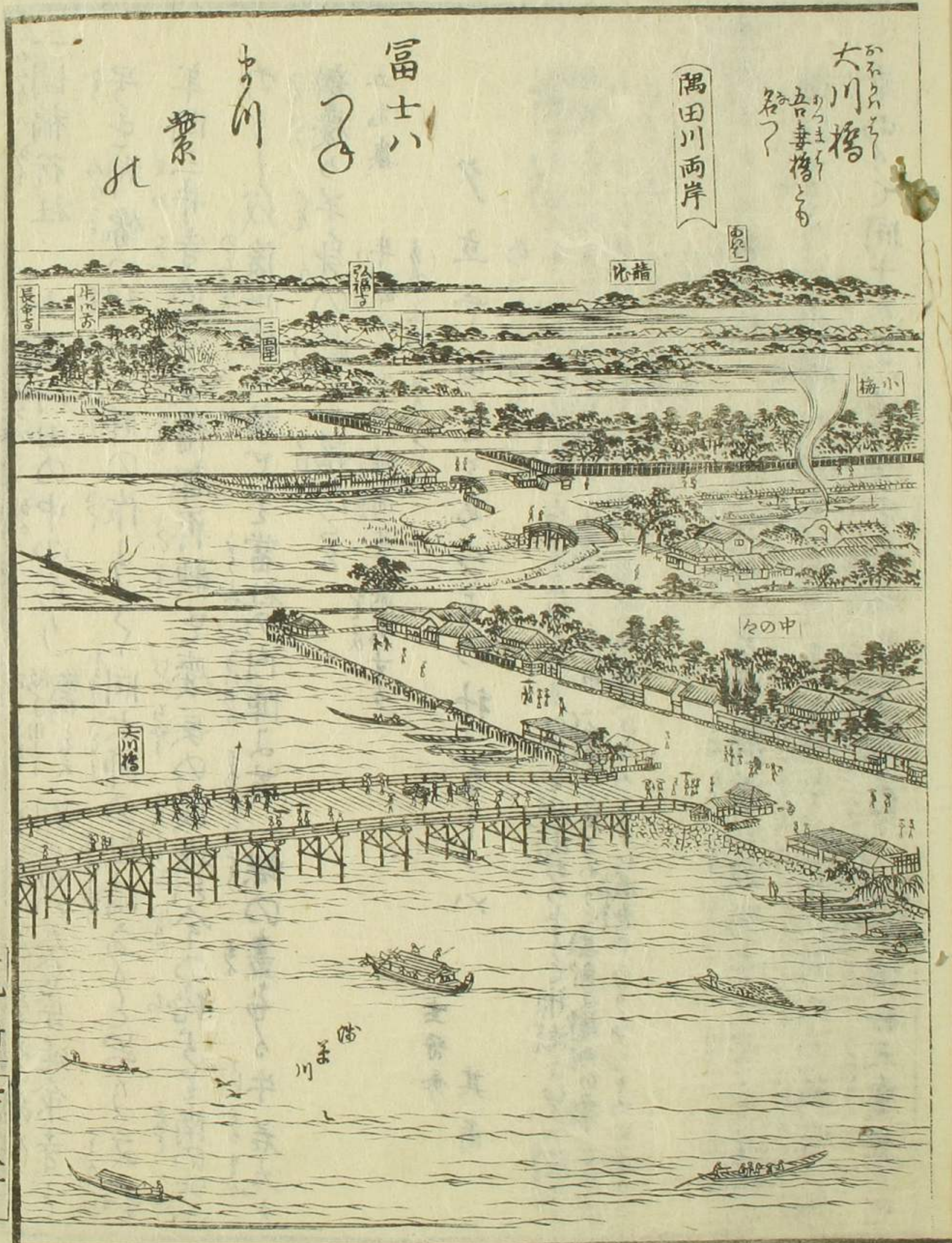
夜下墨水  
 金龍山畔江月浮  
 江搖月湧金龍流  
 扁舟不住天如水  
 兩岸秋風下二列

南郭



荒波  
 山

大坂  
 淡々



大川橋  
 吾妻橋とも  
 名々

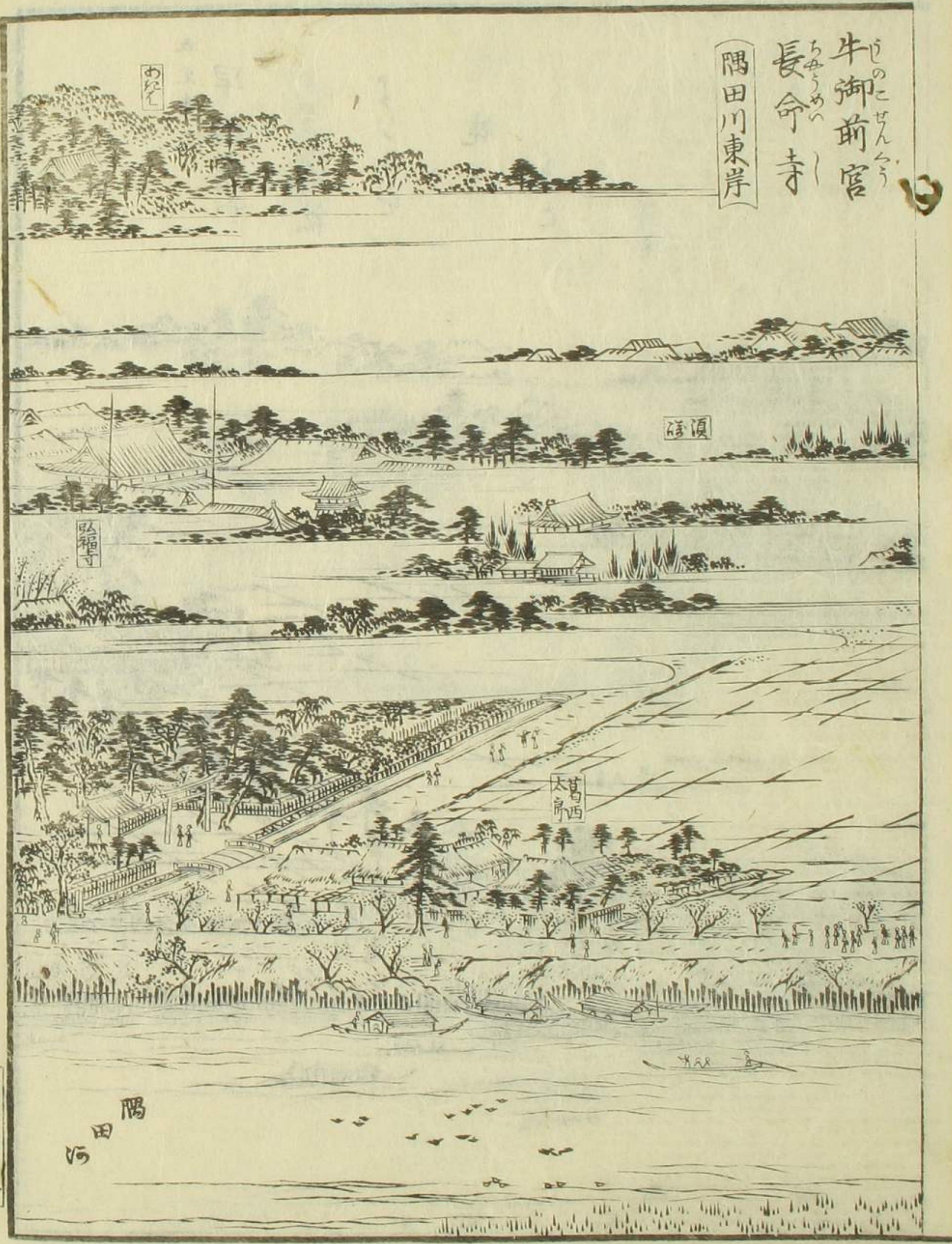
隅田川兩岸

富士

此景  
 此川

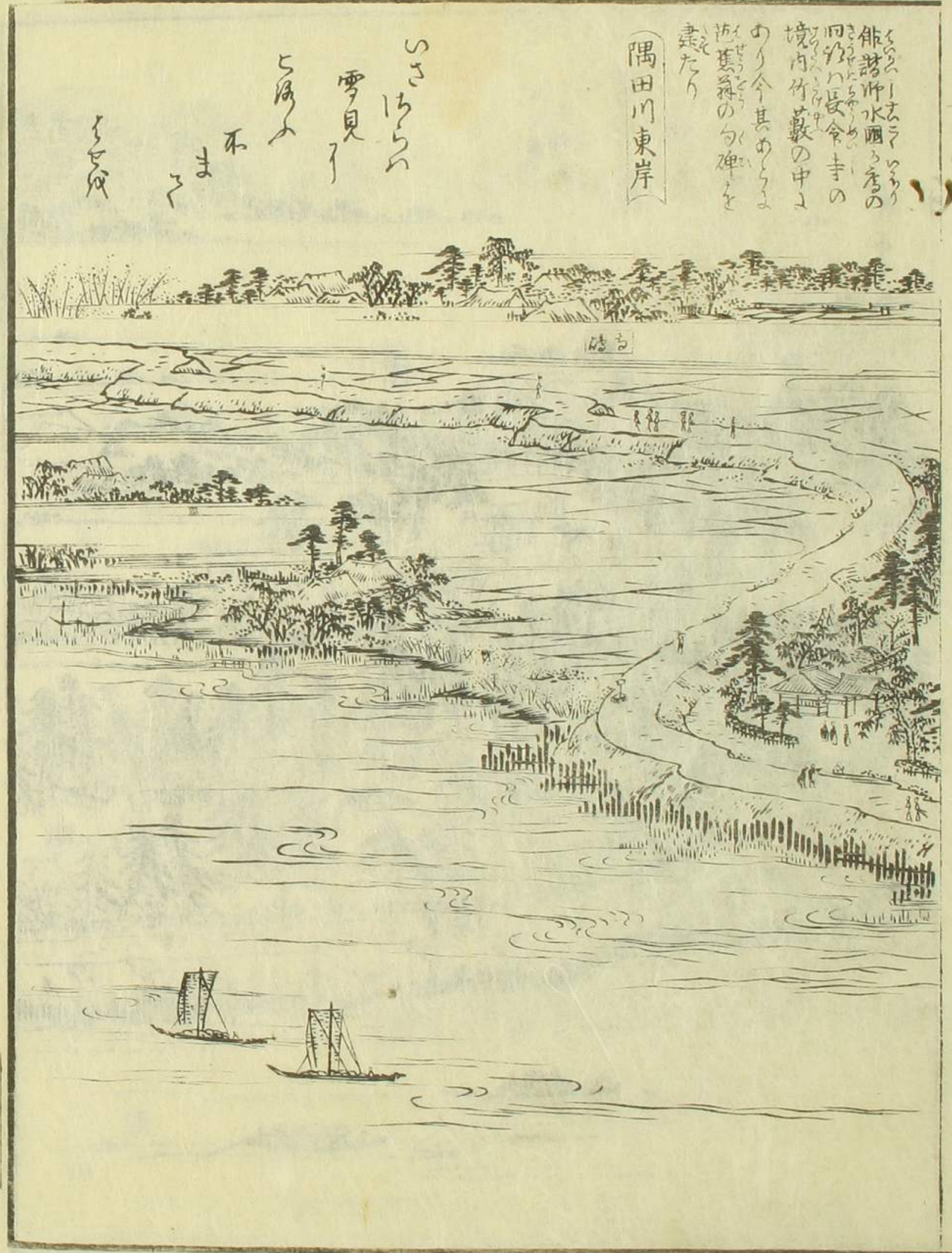
十九ノ冊  
 七ノ八十





能言水園の香の  
同治の長命寺の  
境内竹藪の中  
のり今其のり  
池邊の石碑を  
建たり

隅田川東岸



雪見  
不  
ま  
と  
と

皇孔子 推親 共ニ坐り相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋

九月慈覺大師東園弘法の頂素蓋烏尊位冠の老翁と化現此

比跡を垂永く國家を守護さんと告め仍大師一社了奉

上皇の良本阿闍梨を留て是城守らむ

陽成院の御宇清和帝第七の皇子當國遷されさせたまひ天慶

元年丁酉九月十五日此地に於て薨る依用山良本阿闍梨ら小

暮を奉り牛御前の相殿に合祭り奉るといふ

其後靈言ありて云く

素蓋烏尊第の御子

生を替はせぬと云ふ

或人云尚社を牛御前と稱するは此の地なり牛嶋の古跡なり

つねを思ひ牛御前と唱たりしるるを後世語りて牛御前書あらたまを御前と稱せり

まると云り

按て撰列輪田御前前堂御侍其餘相列の二橋大江戸の月岬等を経て海に臨める此あり

今尚社の辺を須賀村と名づくるもゆり海辺の例なり其頃ハ支那の例なり

ありゆり其の條ゆをのりて考へるゆり半の御跡とする説も據あるに似たり

はまのらるる其の條ゆをのりて考へるゆり半の御跡とする説も據あるに似たり

法華經十部供養碑 今内陣に収めあり長三尺三寸五分あり幅一尺六寸五分あり厚さ

碑陰銘曰

奉造立釋迦像一軀 貞觀十七丁未天三月日 明王院

法華十部 今本院の中は収む青石より其質のよき

聖一上下兩換して全からしむるに立像の釋迦未の容を刻し碑陰に直搦りて

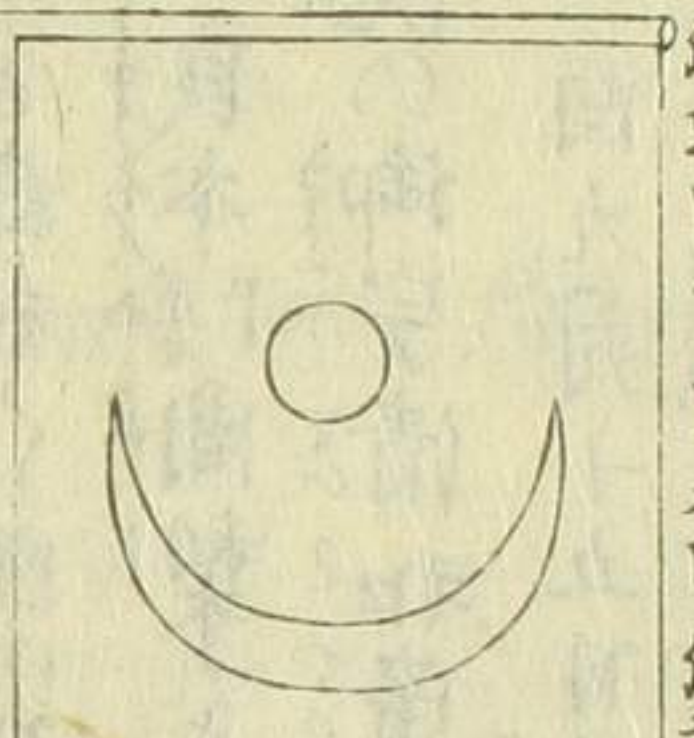
數多を鑿りてしむるは法華貞觀等の文章を刻して鮮明なり

千葉五郎胤道旗 一流 別當最勝寺に在る也東鑑に治承四年庚子九月十九日

たりの依千葉公常胤子息を相具しくや徳の國府に奉會せしむる条下に國府五郎胤道の

名を如(たり)しし准后親房記に壽永三年二月六日鎌倉より福原(ひら)の路の中常胤が

國府五郎胤道同於東六郎胤頼等の名あり胤道の同胞なり母は秩父左郎重弘の女あり



國分庄司

千葉五郎平朝臣胤道

長三尺一寸三分 幅一尺九分 厚九分

同添狀壹通 其文は尚社に在る先祖千葉家再興の旨社たるに依て曼を収るるを記し慶長十八年九月十五日國分宗玄御正勝殿向とあり石橋山合戦より分捕の面々書翰の通り見奉る所早より記し千葉氏二日景末とありて花押を記し直貫決しあり

小田原北条家神領寄附狀 壹通 其文は頃頃堀河の畠山合戦所

奥に戊辰霜月十五日景秀とありて花押を書きあり按に戊辰の永禄十一年戊辰の

當社の往古鎌倉石府將軍頼朝卿宗教厚く養和元年辛丑宮

社を経営のりし小旗てふ葉公常胤其頃當國の主たるふより許多の

田園を寄附し奉りて信を厚くしとあり然るに永禄小至北條

氏直老后大道寺景秀小命一先親の例に似せ神領寄附あり則

社前の水田是なり

寶壽山長命寺 遍照院と号し天台宗東叡山に属せり本尊の

等身の釋迦如來脇士六文殊普賢般若十六善神等の像を安す平

嶋辨財天傳教大師の作り長命水 月一堂の後の方より延壽推 堂前よりあり

柳樹 堂の左の方よりあり元禄五年壬申江戸柳葉子司女保主水某相別無命あり

自在庵舊而址 堂の右竹藪の中よりあり排部水園よりあり室をむきて住たり

雪見の石

當寺昔のころの庵室より寛永年間 大樹御遊獵の初少く御不慮

小あらせられし此寺内は休せたまひ庭前の井の水をりて御薬を懐

ぬひふ須臾中へ常小るらせぬひより此井より長命水の号を賜り

寺の号をも改むべし昔 台弁あり尔来長命寺と稱せし

殊更當ちの雪の名所なり前より隅田川の流をうけて風色ならまといふ

牛頭山弘福禪寺 牛御前宮の東に隣る此辺を須崎といふ

の禪室にて洛陽萬福寺を模して本尊の唐佛の釋迦如來左右に迦葉

阿難より定山鐵牛和尚延寶紀元癸丑創造寸毎歳七月十五日大施餓鬼修行有

佛殿 額 大威徳 聯 本堂の 右の柱 本庵の 筆より

寛天日月久晦祖燈雪徑鯨 甲地雷音雷林木冬華葉

見相傾身敢保未忘法お 揮毫布地自然海界黄金

坐後界上堂并弘福禪林人々交結 坐中并連大聖室取ぬ修依

木犀 佛殿 刹竿旗 座禪堂 佛殿 佛 蓮 聯 大治鍊宋未地入選

牌堂 坐禪堂 并 閑山堂 閑山堂 佛 蓮 虛室粉碎方許を揚

慈 聯 一株老桂長垂蔭 象斛天香遠襲人

浴積山堆摩詰家風真廣大 浴室 天王殿 佛殿 佛 蓮 佛殿

日来月往衲侶法喜永殷亮 道泰玉麟現瑞 林東奎鳳夏儀

高懸寶鏡放淫終身信身 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

鎮守宮 天桂石 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

方丈 聯 大坐當軒佛廢云須玉手

聯 高懸寶鏡放淫終身信身

聯 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

聯 鎮守宮 天桂石 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

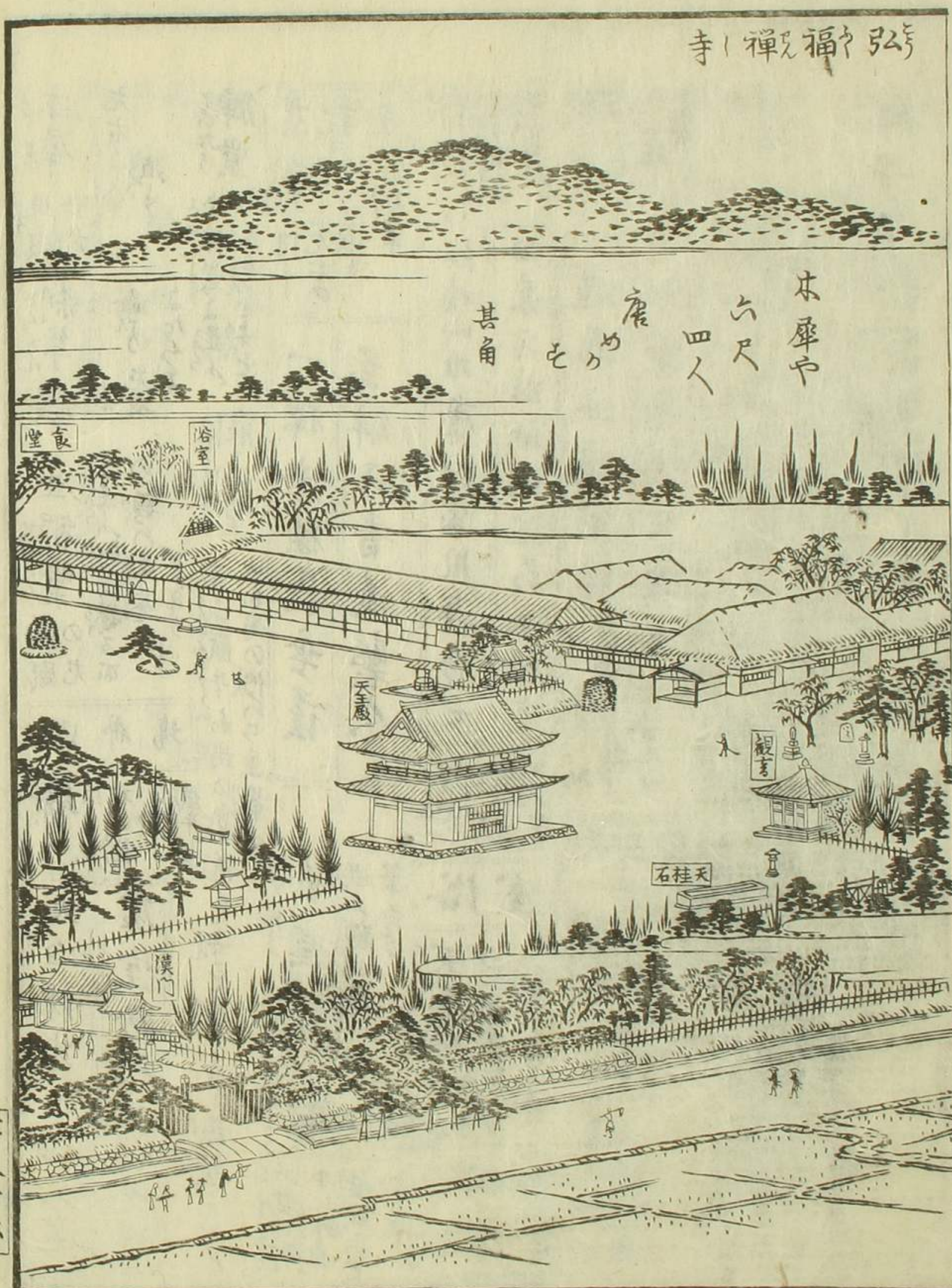
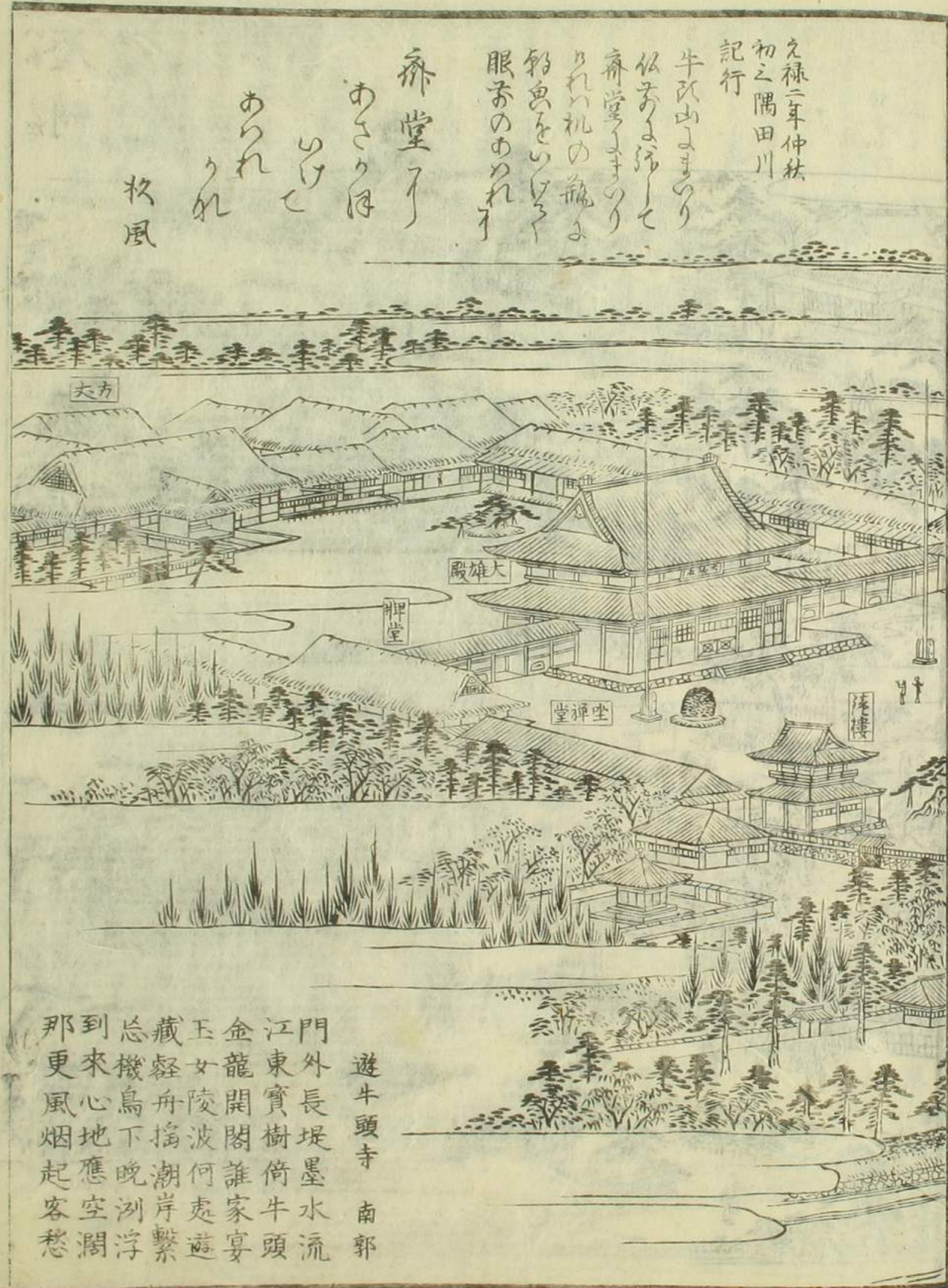
聯 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

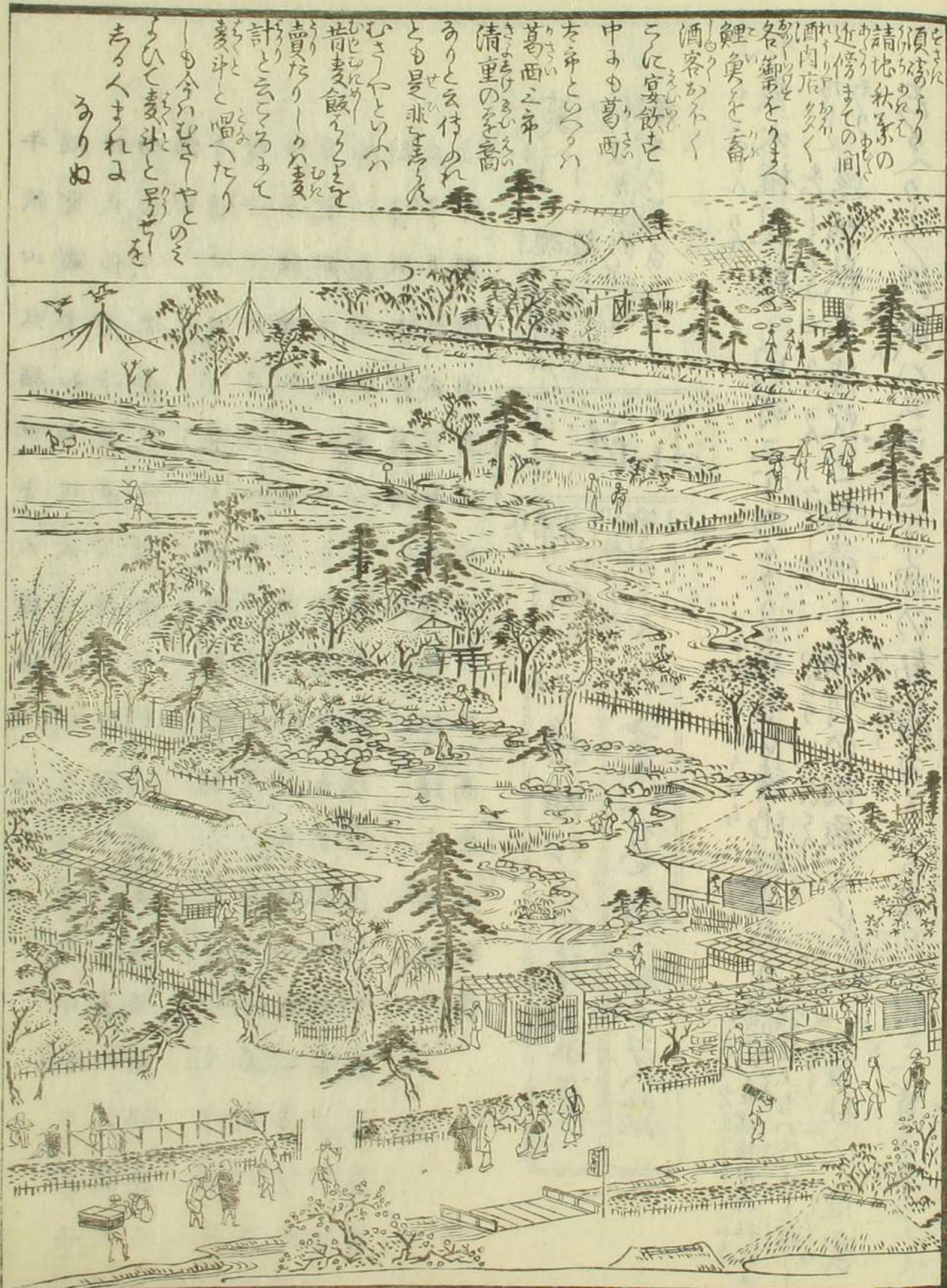
聯 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

聯 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿

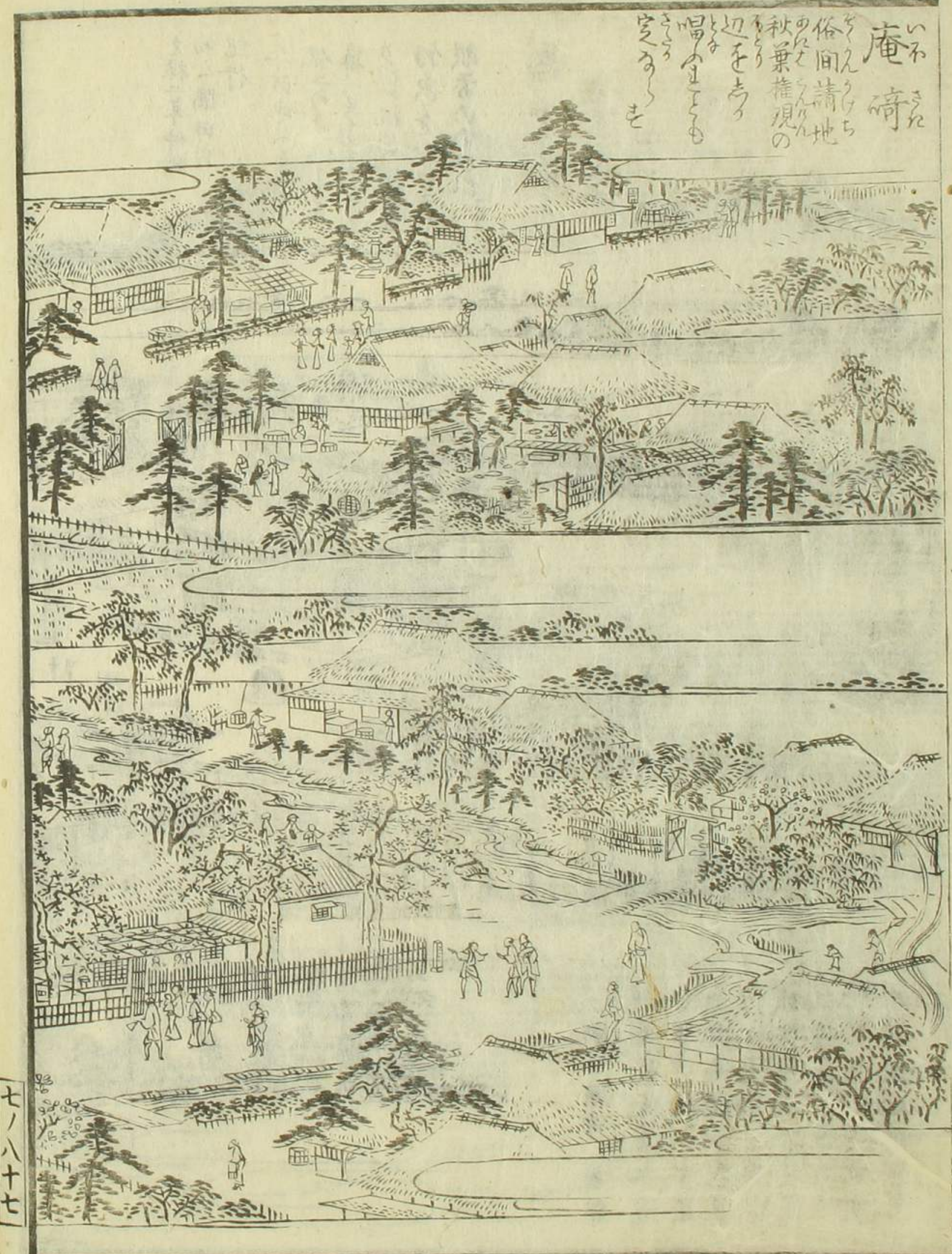
聯 鐘樓 閣王天 經 鐘 佛殿







頂上の  
 清地秋葉の  
 近傍まての間  
 酒客あふく  
 中めの葛西  
 万西之市  
 清重のそを商  
 ありと云付のれ  
 とも是非さるん  
 むさやといひの  
 肯麦飯うらまを  
 計と云ころあて  
 麦汁と留たり  
 今今ひまやとのミ  
 ちひて麦汁と号せを  
 ありぬ



いん  
 庵  
 俗間請地  
 秋葉権現の  
 辺をあら  
 唱のまても  
 定みらる  
 き

牛頭山弘福禪寺大鐘銘並序  
 瑞聖鐵牛和尙住弘福之明年修葺寺宇將大完井  
 伊氏伯耆守直武公與玉心院太夫人壽林元榮大  
 師茂心施金為造巨鐘以利幽顯寓書徵余銘為之  
 銘曰阜兮有大法將整飭林官兮曷殊天匠幸值  
 牛首之母子全心乃召鳧氏兮簡赤金範斯巨器  
 賢守兮禪林曉昏考擊兮萬歲以千春億兆樂業兮  
 兮鎮禪所慶兮子孫振振以空為口兮密婁為毫  
 豈淺鮮斯行莫殫一七徐鐘上游穀且  
 歸仁錡斯慶子孫萬歲以空為口兮密婁為毫  
 擬書厥勤兮莫殫一七徐鐘上游穀且  
 貞亨五羊歲在著雍執徐世高泉激敬撰  
 支那國傳臨濟正宗世四世

漢門總門をいひ  
 鐵牛の筆あり  
 山法牛龍右  
 聯龍右  
 福地弘安法名彙集  
 玄門高僧聖法法

秋葉大権現社 同所三丁あり東の方請地材あり  
 遠別秋葉権現を勧請し稻荷の相殿とて  
 あるへうへ或い云應年間の勧請ありとも別尚ハ三寶末末あり

千葉山満願寺と号し神泉の松と稱する社前あり松の控より  
 清泉涌出するを諸の病み驗ありといふ  
 境内林泉幽邃うして四時遊觀の地あり門前酒肆食店多く名  
 生例を構へて鯉魚を蓄ふ

清瀧山蓮華寺 寺嶋村小あり  
 寺記云く昔此地の海原あり後世佛子居て  
 太子自彫造ありと云北条經時の念持佛よと往古の相及鎌倉依て  
 目谷ありしを弘安三年の秋北条頼助寺院ありといふ奉る共あり  
 此比引稿一同年八月二日入佛供養を營し故今に至る迄此日を  
 以て縁日とて又是より先寛元二年の夏國中大に疫疾流行し  
 人民死する者少ありと経時頗小是を歎れ奉る告て諸人の病



請地  
 秋葉権現宮  
 子代世綿并社  
 社  
 丹楓  
 晩秋の  
 此の  
 静  
 奇  
 景

新島  
左子堂  
蓮花寺



若くは消除せんとして懇々祈願と成夜奉る経時又靈示ありて秘蔵  
 を錫小即此秘蔵小よりて其頃病を退と命を全ふす者之を  
 知らざるとあり 今に至りては秘蔵の件を知らず

相傳小寛元四年丙午三月下旬北條經時疾に臨む其時舎才時頼  
 を側へ招け示して云く我疾難治あり死後に至らば一宇の梵刹を創  
 建し年頃念ふ所の聖徳左子の像を安置すべしといひ終て同四月  
 朔日享年二十八歳小して逝去あり 東鑑云云寛元四年丙午四月一日今日道心位下  
 行武藏守子朝臣經時卒と法名女樂年二十三

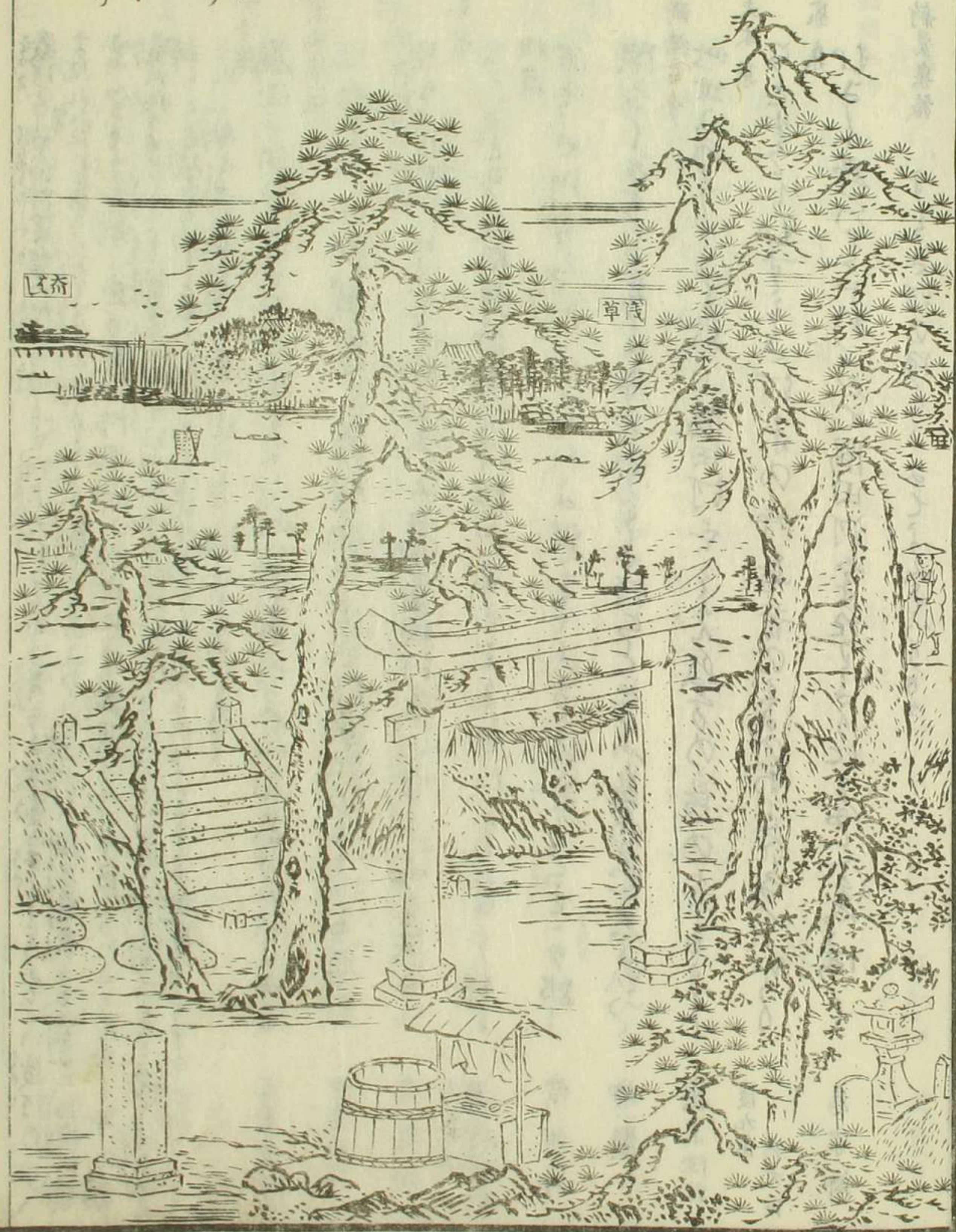
とあり證 依時頼遺命を奉りて鎌倉佐々谷一宇を闢き蓮華寺  
 と号く 經時の法号を蓮華寺殿前  
 此引女樂大禪定門と号す  
 深井法眼範智を保りて云されと鎌倉  
 大日記云良忠とありて云く經時と詳 又其後經時の子頼助此寺嶋を領せしり

出離の志頻りて忽小刺髪し弘安三年の秋鎌倉君の蓮華寺に依り  
 寺嶋を移し自居山たり 依りて大僧に頼助と号せり此は先づ審範を居山とすとあり  
 鎌倉ありての事をいふあり此寺は至りて頼助居山  
 たりとありて諸宗系に經時の子と顯助といふ号を載り傍に依りて疑ふに依りて

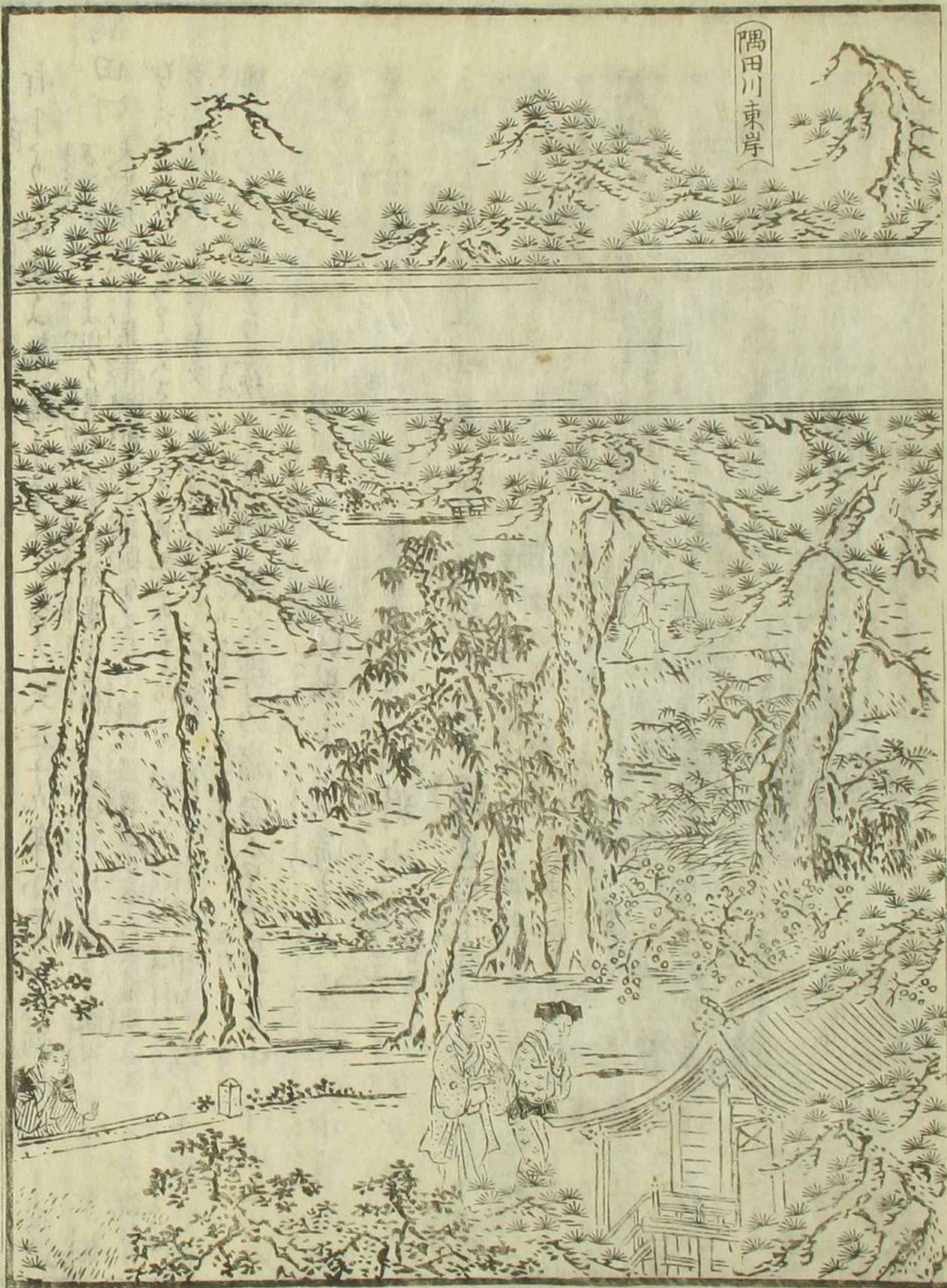
とのつたを誤るるありと頼助の顯助の事とありて疑ふをわづらひ



白岩山明神社



隅田川東岸









追討の大勢とて大瀧門佐平直方右兵衛佐中原成道等朝探り  
應一ニ萬二千余騎より發向と忠常其身の千葉の城に楯籠り  
陸奥権女忠頼を大ねと其勢二萬余騎を率へてすここの  
南の陣を取同十五日官軍成道の舎弟伊勢成俊直方の子  
息阿多見四郎聖範共の勢を合せ先登一たの戦ふ故に先陣の  
大頼攸走とされと忠常の残兵一萬五千余騎に駈られ官軍の  
後陣より直方も本道の勢の落着き推せりといふあらと引  
返し放軍の兵卒を集んとて隅田河原の陣を取と云

東鑑曰 治承四年庚子十月二日辛巳武衛相乘  
于常胤廣常等之舟楫濟木井隅田西河精兵及三  
萬餘騎赴武藏國豊嶋權井清光葛西三郎清重等  
最前泰上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎  
泰向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝と與別養衛追伐の首途  
あつと云条下千葉成常胤八田右衛門尉知家東海道の大将と

しと常陸中總兩國の勢を率へて宇右行方を経て岩崎より隅田  
川の湊より渡り逢下畧

須田河原 隅田河原と抄れ

隅田河原 深堀橋より一泊り然谷に至る行程凡拾六里是を熊谷場と

云天正二年小田原北条氏これを荒れたりといふ

官府の命ありて三圍編芥の辺より本母寺の隙近堤の左右(桃橋柵の  
二樹を殖させられ二月の末より孫生の末より紅紫翠白枝を  
交(されぬら錦鏽を晒せり如く幽艶賞するに堪たりと)董菜碎  
米菜盛りの頃(此上)花纏を敷り如く一時の壯觀たり

隅田宿 竹れの地をいふ今あるへからと往古の奥列街道の釋舎  
あるへ東鑑は治承四年庚子十月二日頼朝を右井隅田の河原を渡り  
るといふ条下に今日武衛の御乳母故八田武者宗綱の息女

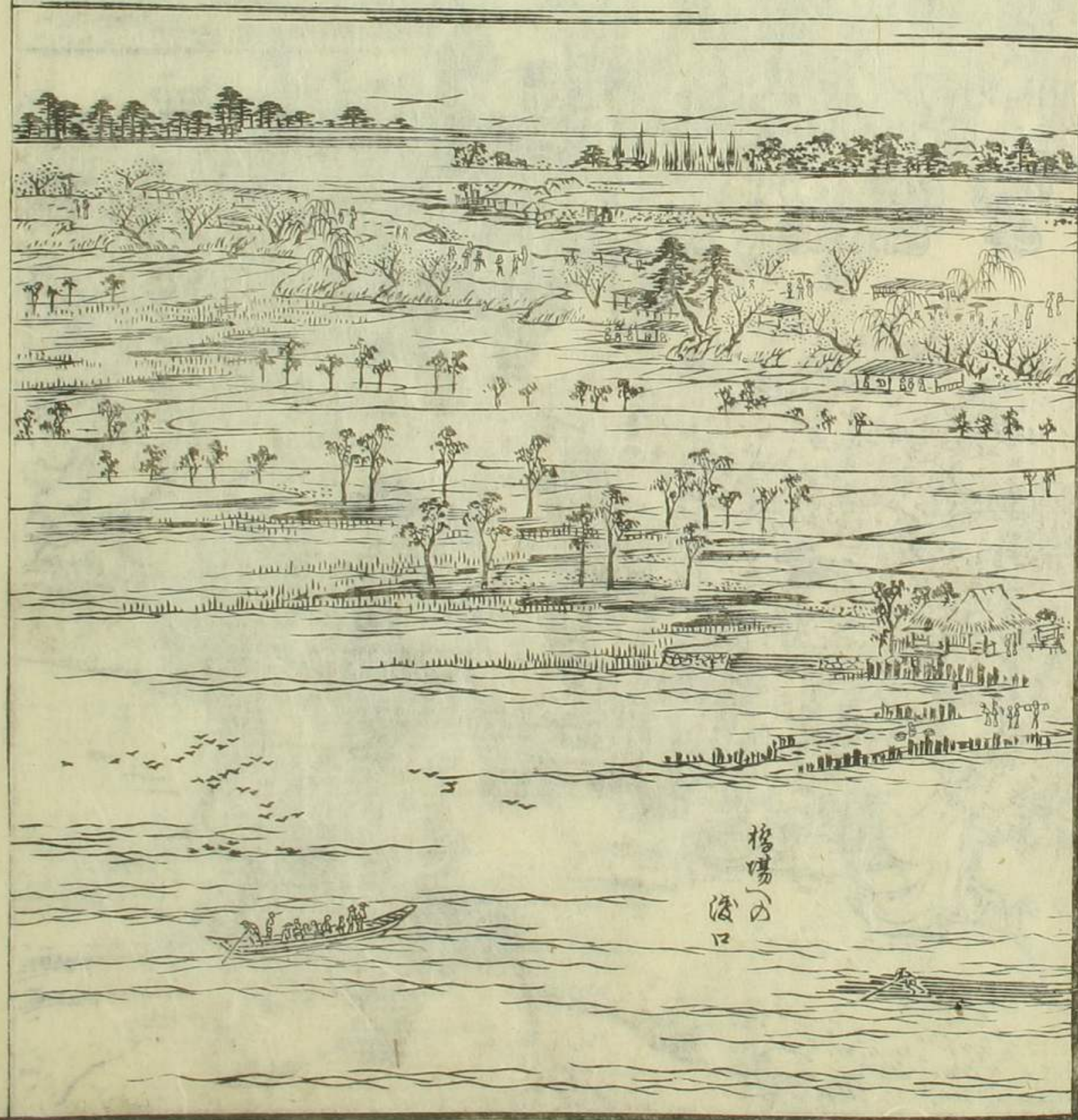
夫本集

西二位

御當家より

改定

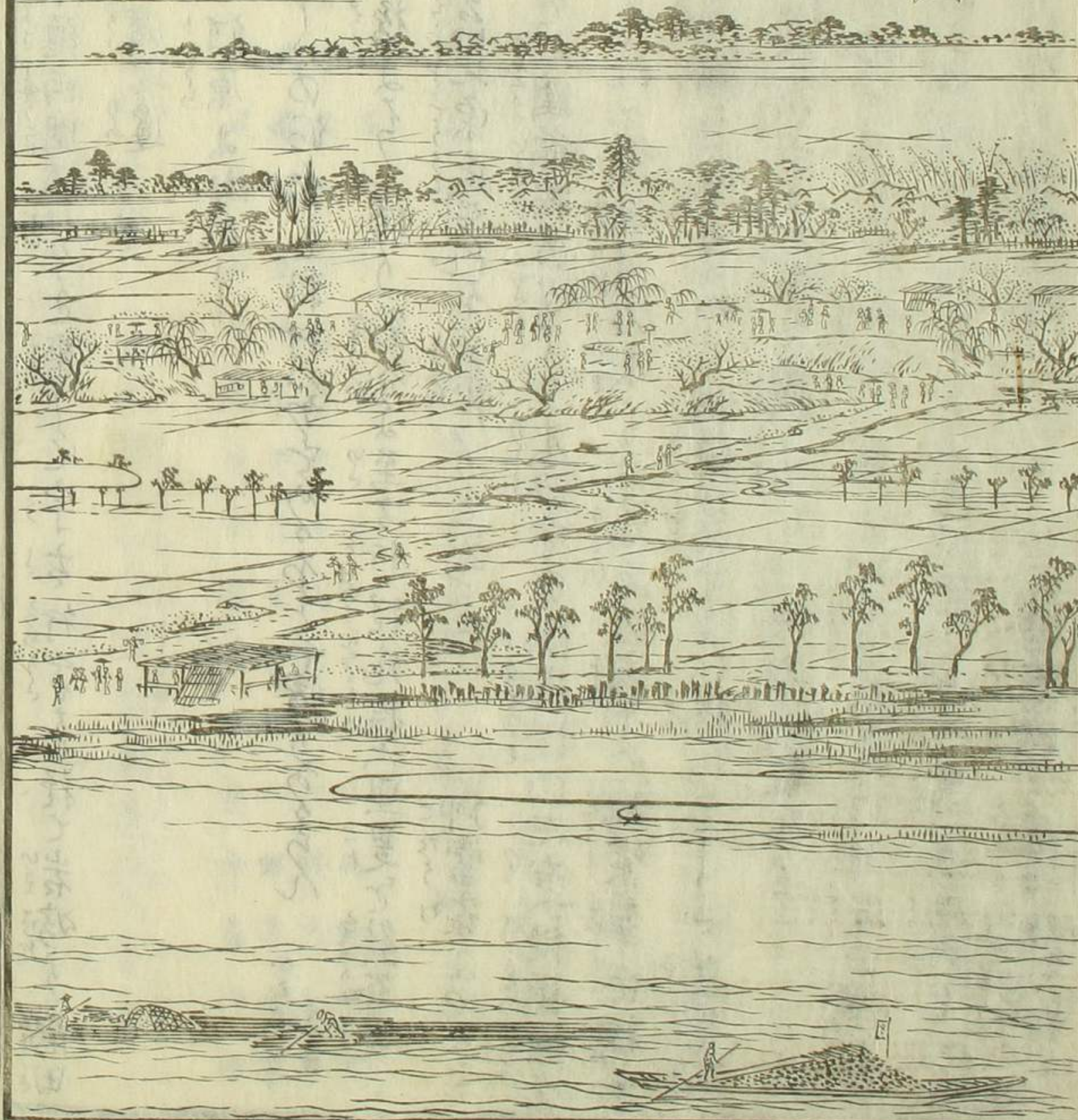
荒波根の  
 春風よ  
 あらた  
 すま  
 河原の  
 花を  
 るこ  
 うふ  
 冷泉  
 宿村台



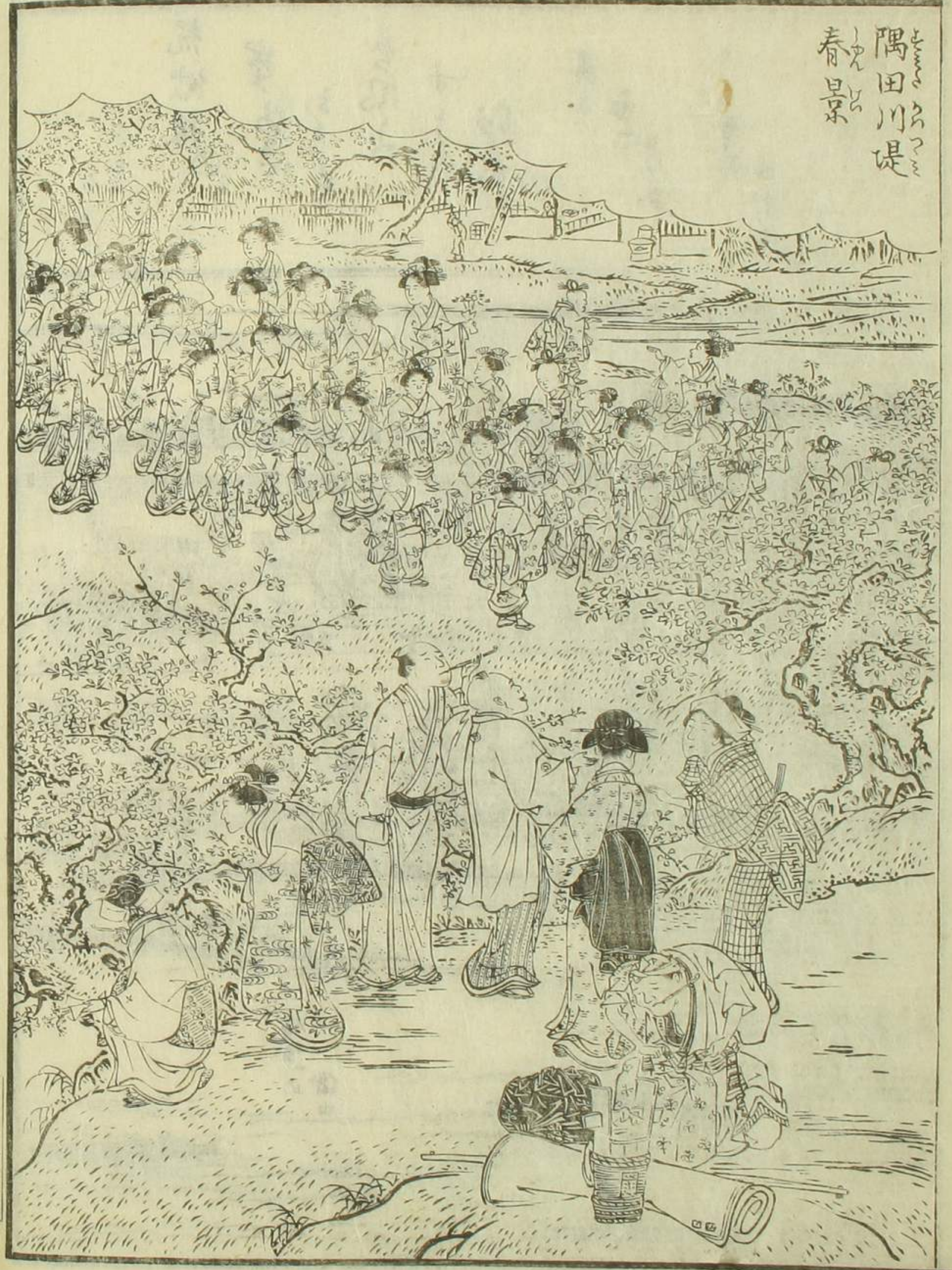
梅場  
 の  
 渡り

陽田川渡  
 隅田川東岸  
 初花も

春風よ  
 とふ  
 まて  
 冷泉  
 宿久台



隅田川堤  
春景



隅田川の堤を歩くと  
 青柳の枝髪も緑の眉  
 うらひやうらひなれこれ花の  
 花のむとろひそめさ  
 花のむとろひそめさ  
 ささやひはくらひあんと  
 ささやひはくらひあんと  
 ささやひはくらひあんと  
 ささやひはくらひあんと  
 ひこそろろたる挿頭よや  
 ん物ころんとこそろろかひの  
 とまる本の幸  
 ありあらし



東廠山小屬と本尊の五智如來より中一の阿彌陀如來の像の徳  
 ち子の作るりと云けり貞元年間忠圓阿耨梨當寺を草創して天正十八年  
 台命あり依て昔の梅若寺と呼びしを慶長十二年近衛閑白信尹武將  
 國より移りし時隅田河邊迄のゆくて小當寺へ立よりせられ寺号を改  
 むつたといふ事あり一寺僧應謙を依本母寺の號を賜ひぬ其時論  
 本母寺と畫され一真蹟今も存すく當寺才一の什宝とて慶安以後官府より  
 寺料若干を附せられ朱章を賜ふ又寛文の始 大樹此比り  
 御遊獵の初當寺を御建立ありて新殿を造りてせぬひぬ  
 梅は本母の梅の分なるらんされ梅の毎二八日母より母より本朝の俗言ありて  
 止賀と記し西條詩話に幸得梅山信嘗日本茶と作りし山神國なる梅尾の茶を賞美  
 せり又梅の中舞よりある事文に梅の縁をよめるありて梅の吹雪あり  
 一又低城集に云く東山の傍雪村諱の友梅と云く梅尾より作るてこの山の名に諱の文字  
 ありと云云是も梅と云く梅と云く梅の縁をよめるありて梅の吹雪あり  
 梅の吹雪とす母と母と字取頗似し梅の縁をよめるありて梅の吹雪あり  
 増續前府とて書し夷堅志を引きて云く  
 北朝山 濤字致遠赴召宋神宗問曰卿自山路來自  
 驛路來濤曰自山路來上曰木公木母如何濤曰木

公方傲歲木母正含春

注曰木公松也木母梅也稱旨除中書云  
 本母寺縁起の跋は湖海新聞を引きて梅を本母とすを譽り湖海新聞より文上の夷堅  
 志の意は同一又青木氏著る草廬雜考にも此の事を載り今集の跋も  
 雪ふれの本毎に花を咲よりりしを梅とせりてからま  
 春の物吹雪の風のうり香は本毎に梅とありひるりれ  
 年の内の香を本毎の起とて春を返とてまねる事  
 梅若丸塚 本母寺の境内にありて塚上より小祠あり梅若丸の垂を祠として  
 山王権現とて縁起は梅若丸の山王 後より梅を植て是を印の梅と号す昔  
 柳の枯て今も若木  
 例年二月十五日忌日たる故より大に仏具行あり此日都下の  
 貴賤君等と承せり

梅若丸塚 本母寺の境内にありて塚上より小祠あり梅若丸の垂を祠として  
 山王権現とて縁起は梅若丸の山王 後より梅を植て是を印の梅と号す昔  
 柳の枯て今も若木  
 例年二月十五日忌日たる故より大に仏具行あり此日都下の  
 貴賤君等と承せり

古塚のゆけゆくありすは河まきくもゆるともゆる袖は 道真准后  
 中頃一乘冥白康道を園東下向のころ此地より  
 遠近あり

田圃雜記 かくてすはの辺よりしてはるくを披講るとして

本母寺  
梅若塚  
水神宮  
若宮八幡

隅田川東岸

本母寺

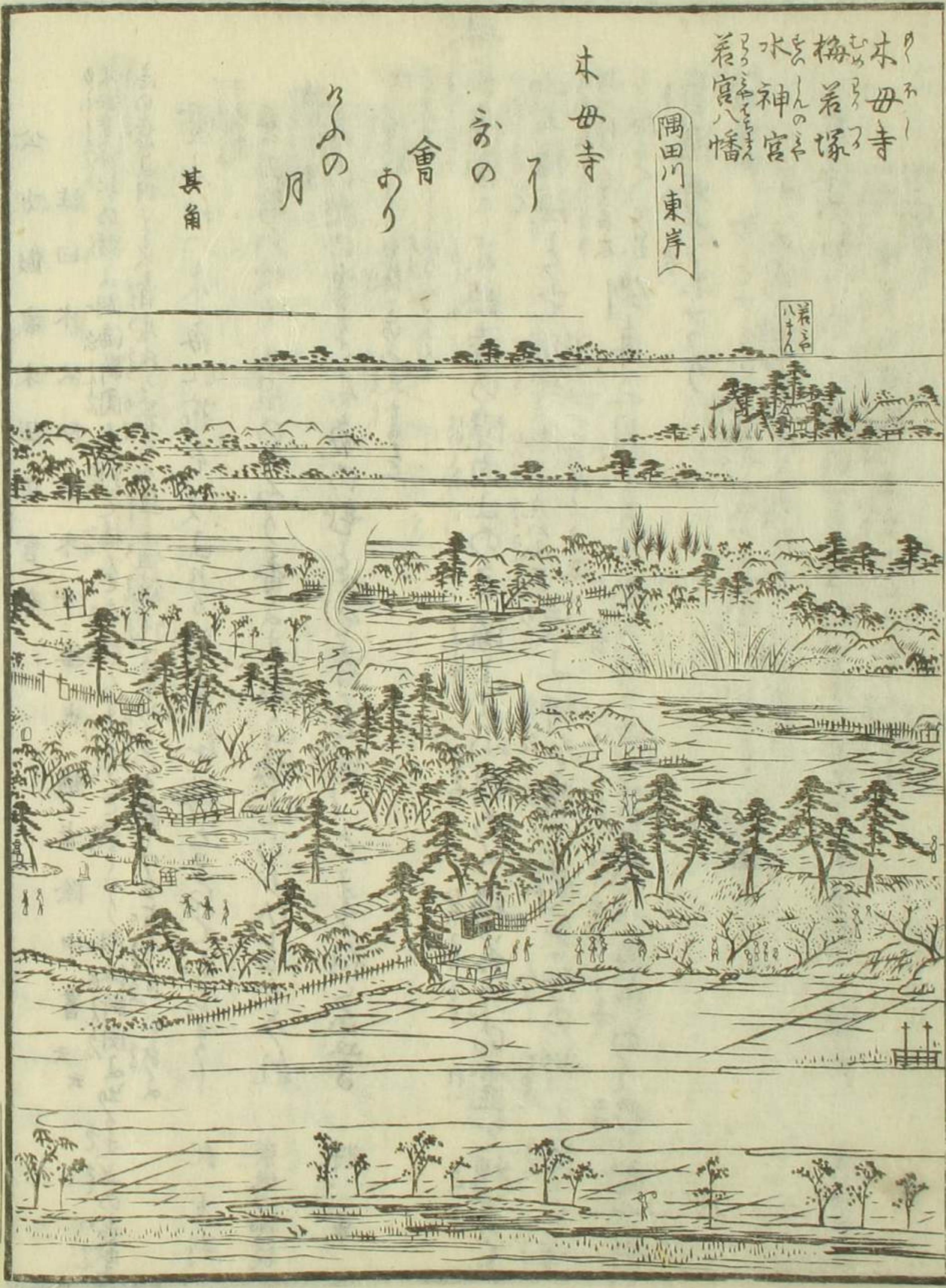
会

の

月

其角

其角



田園雜記

ついでに塚の  
すゝめられ  
今のところ  
おろえて

右塚の

くわ行の

すゝめられ

すゝめられ

ねん

袖

道真准后



隅田川東岸



まてられいへし柳のたぐいのまき風流の隅田河系了

康道公

うれるをさひひせや古塚と都のまきとさう川風のま

近衛 信尹公

あやゆとらへし折も朽らそあをれをわりのところ古塚

良尚親王

此和歌の曼殊院宮宮東下向のりし時此地に梅ひのひの頃梅あり

小真蹟の短冊今將本母手に書たり名書後入とのまあり

緑起云梅若丸の洛陽北白川吉田少将惟房卿の子なり

同縁起は惟房を副をたを慶(日)

吉吉の御神は新嘉あり後諸られり一児あれは梅若丸の梅若丸

七歳の年比叡の月林寺よ入て習字まどり又其頃東門院といるゆも

松若丸といふ児ありて日頃才の程を挑み争ひけれとも梅若丸より

をうらやまをりさるを彼坊の法師原に惜れるまありひをその闘争の

事出まよられい梅若丸の潜小舟を道して北白川の舟は歸らんと

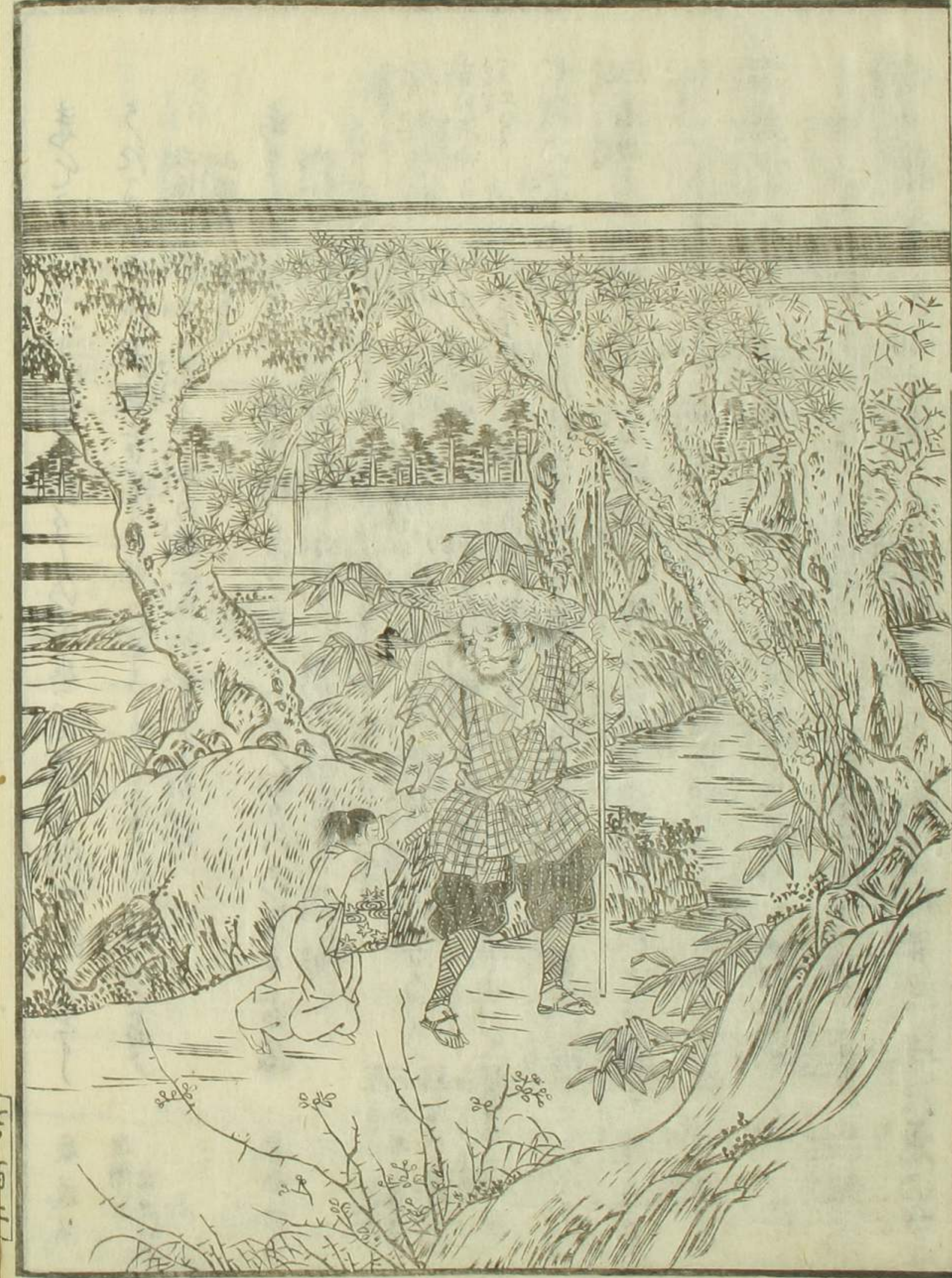
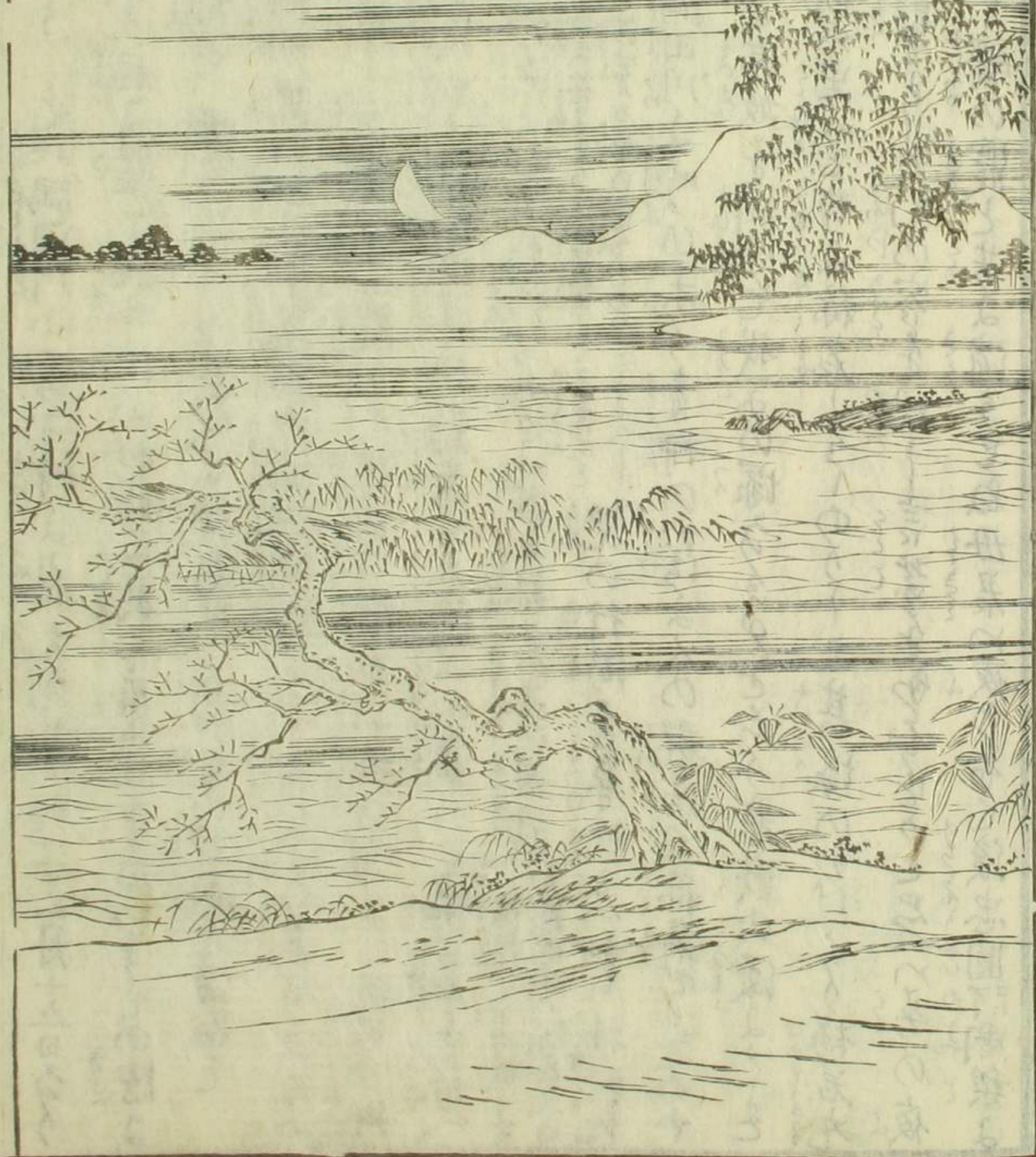
一吟めて大津の浦小至る頃ハ二月廿日あまりの夜なり然し陸奥の

信夫孫ちといふる人商人小出のひ孫ちなり欺きて遠く東の方小



梅長九七のう  
 比叡の月林寺を  
 のうれおて花治北  
 白川のあはれん  
 とくめて大津の  
 浦よりなるい  
 奥陸の信夫の者  
 とする人あはひの  
 ちぢよさうあさむ  
 くれともくこの  
 隈田川に流るる  
 こころの文よ  
 詳あり

園に三人買藤を  
 陸奥南坂の産  
 ありと今も有  
 ぬの人其怨靈  
 あるををてかき  
 よ至ると夫はの  
 羽田(神)に氏  
 人となりて  
 活さるる如し





又謡曲横川といふもこれに似たり其畧は云後朱蕉院の御宇長曆年中花紫海に横川といふ  
美が新ありし商人の勾引され常陸國麻績郡の社傍神宮寺に三つとくありたり其母の  
うくとちあちておひ子の跡を尋さすまゝの跡に犯れり同流生の海よりあり常陸國横川に  
到り岸花爛漫とて蓋はるは深きとて此水中に子ありと流る花をひきひひありてとて  
しりれり里人等其故を問あり合するはあれとて彼犯女を神宮寺に住む行儀ありて  
されしこのあまの物語のいひをいひて後々久しき母子の対面ともは後由はたわ  
より慈悲深かりりれり直に横川に眼をせし母子ともははくしとてこれより東國麻績に  
按し梅若丸の事蹟は先は筆を如く秋夜長物語るは謡曲の横川をいひて伴相和なり  
梅 花 無 盡 藏 詩 註 曰  
隅 田 在 武 藏 下 總 西 國 間 路 傍 小 塚 有 柳  
又 同 書 曰  
河 邊 有 柳 樹 蓋 吉 田 之 子 梅 若 丸 墓 所 也 其 母 北 白  
河 人 云 云

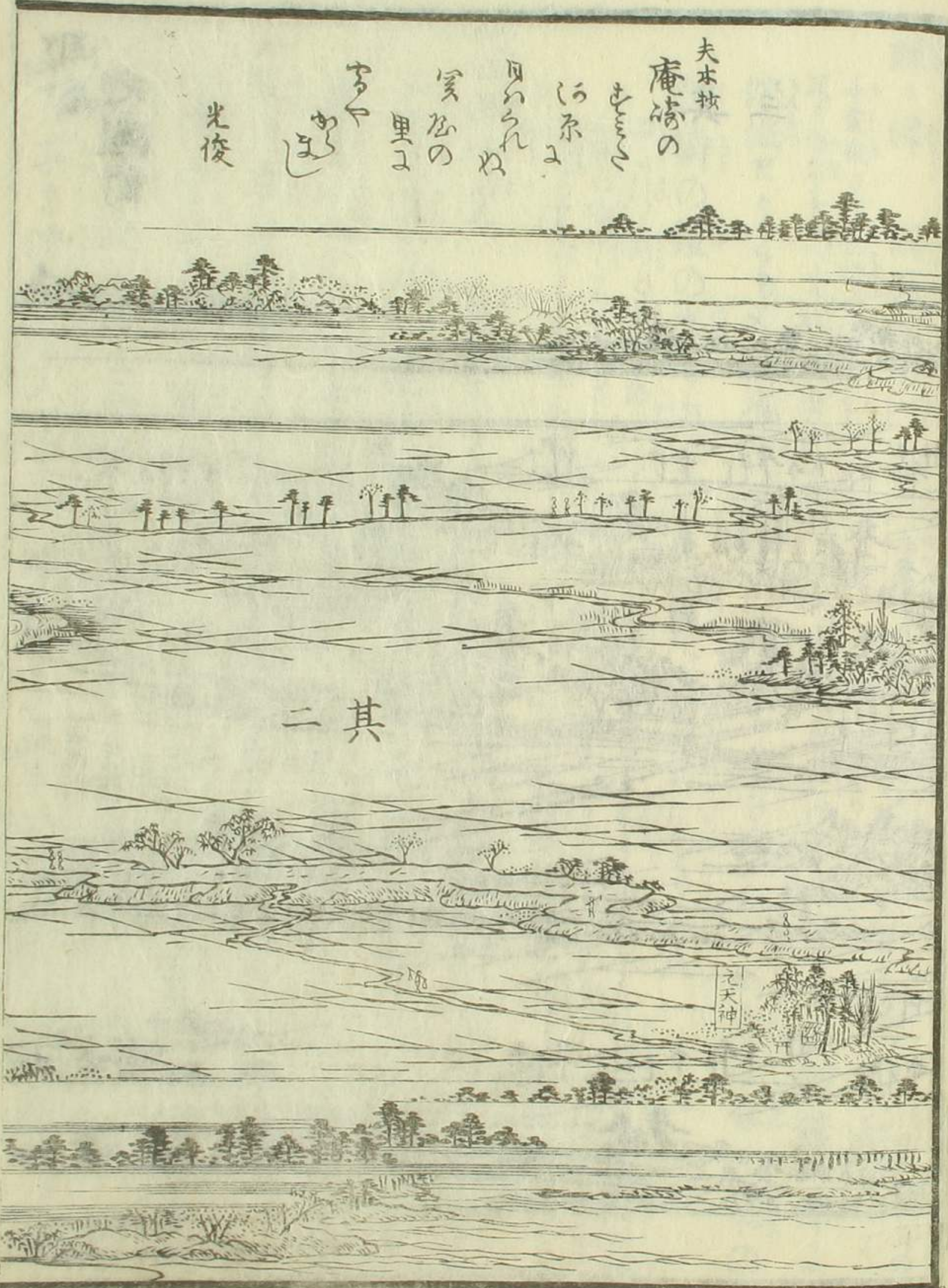
内川 本母寺の後の方の小川をいひ或人の説に往古荒川後瀬川に投じ  
流るる時の言はりといひり  
御茸裁畑 同所内川を隔る北の方の土淵をいひ作松の本立のまゝ  
頗美景小のり

丹頂池 同所堤のりあり池の中は小島を築く往古  
台命にりり

此池の中嶋に丹頂の鶴と放ち飼ひあひりたり故小若とせりといふ  
庵崎 本母寺の北の方とも又い請地村秋葉権現の辺ありともいふ  
澄月お枕又武藏國に加ま本抄藤原草等又下總國に入たり同  
名駿河ともあり紫の一本といふ冊子に小梅村の出崎を彦彦と云人の  
是も怪ありと云又同書に昔本所地の地入海にて例崎殊小駁  
あり一故は五百崎と作りしといひ然れとも未考

新後拾遺  
家ためいひとひもをうね彦彦の隅田河系に宿やあらま  
今宵中々誰者あらんいほきたのすまの秋の月影 順徳院  
関屋里 牛田の辺をいひ澄月お枕又武藏國に入たり  
彦彦のすまの河系に目いほまの里は宿やあらま  
このまの集まりの康元元年九月鹿嶋の社にすまの隅田川のすまの此流の  
上のまの河の流すまの里のあをいひりれり彦彦の里にすまの海船もあはれ  
たりといふ  
を復院の宮東市下向の時此地は遠達一ありて  
あるこの道は彦彦の里もあはれり隅田河系のありぬありぬ 道見親王





夫本城  
庵橋の  
は系  
目んらん  
笑松の  
里  
光俊

二其

之天神



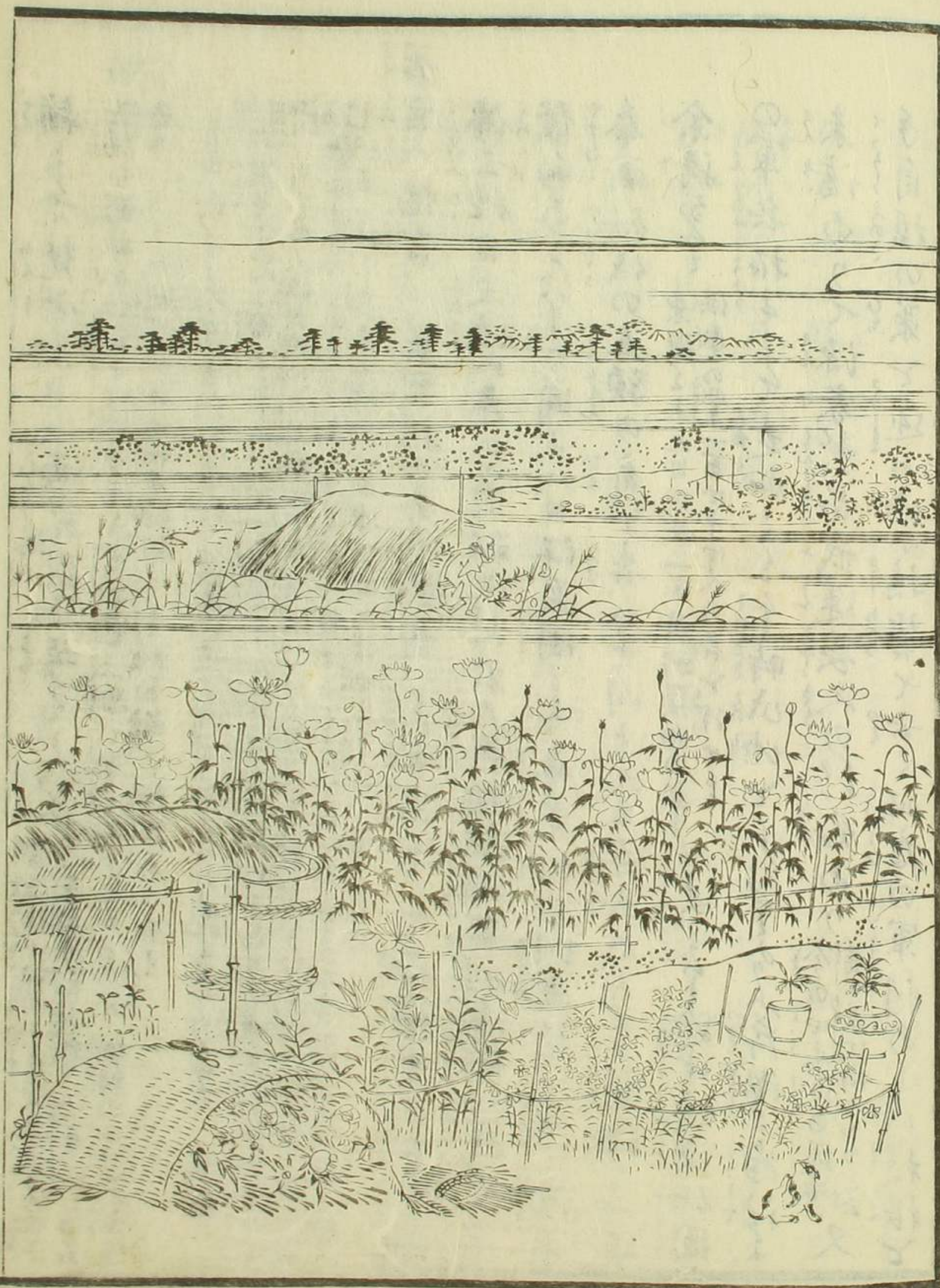
牛田  
薬所堂  
屋  
隅田川上流

二其

川田

牛田





葛西の辺へ家の後  
 園あり圃畦あり  
 悉く四季の花を  
 栽せんとすも  
 芳香あり観るに  
 土人園家の時と  
 清くまれば川取  
 大江戸の市街を  
 花戸ふりし  
 鬻りつゝ  
 影



轉して梵宇と云々 西光院と号くと云々  
吉原姑小田原小倉家子孫の遺蹟也  
西光院の石塔は西光院の遺蹟也  
西光院の石塔は西光院の遺蹟也

若宮八幡宮 善福寺と号と云々  
常杉  
常杉の戸は月もひりり花もありあり  
又連立師の中にも  
又連立師の中にも

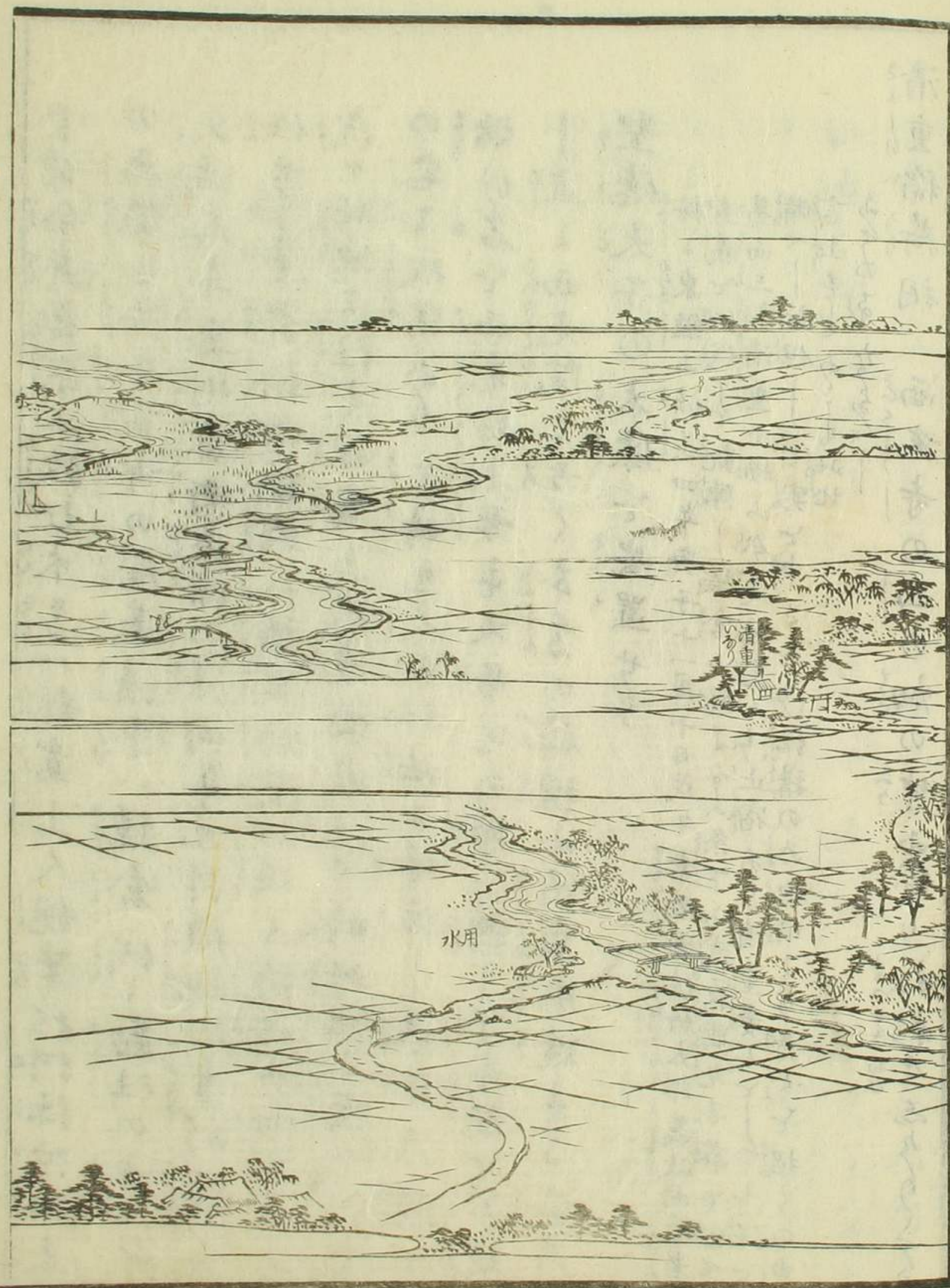
傳云姓古文治六年己酉秋七月右大将頼朝卿奥州奉衡征伐して  
發向ありて同日伊豆國より専光坊の阿闍梨と云々  
奉衡征伐の立願の旨と告らる同日十九日途出ありて勢續一子  
余騎ありて  
東鑑二十九日丁丑二不與州發向の末に  
供奉の衆一百四十四人の名を録せり

手自撰の策と逆不地小指誓て云々此度の軍利ありて  
今の本通の道は  
昔の奥州街道なりと云

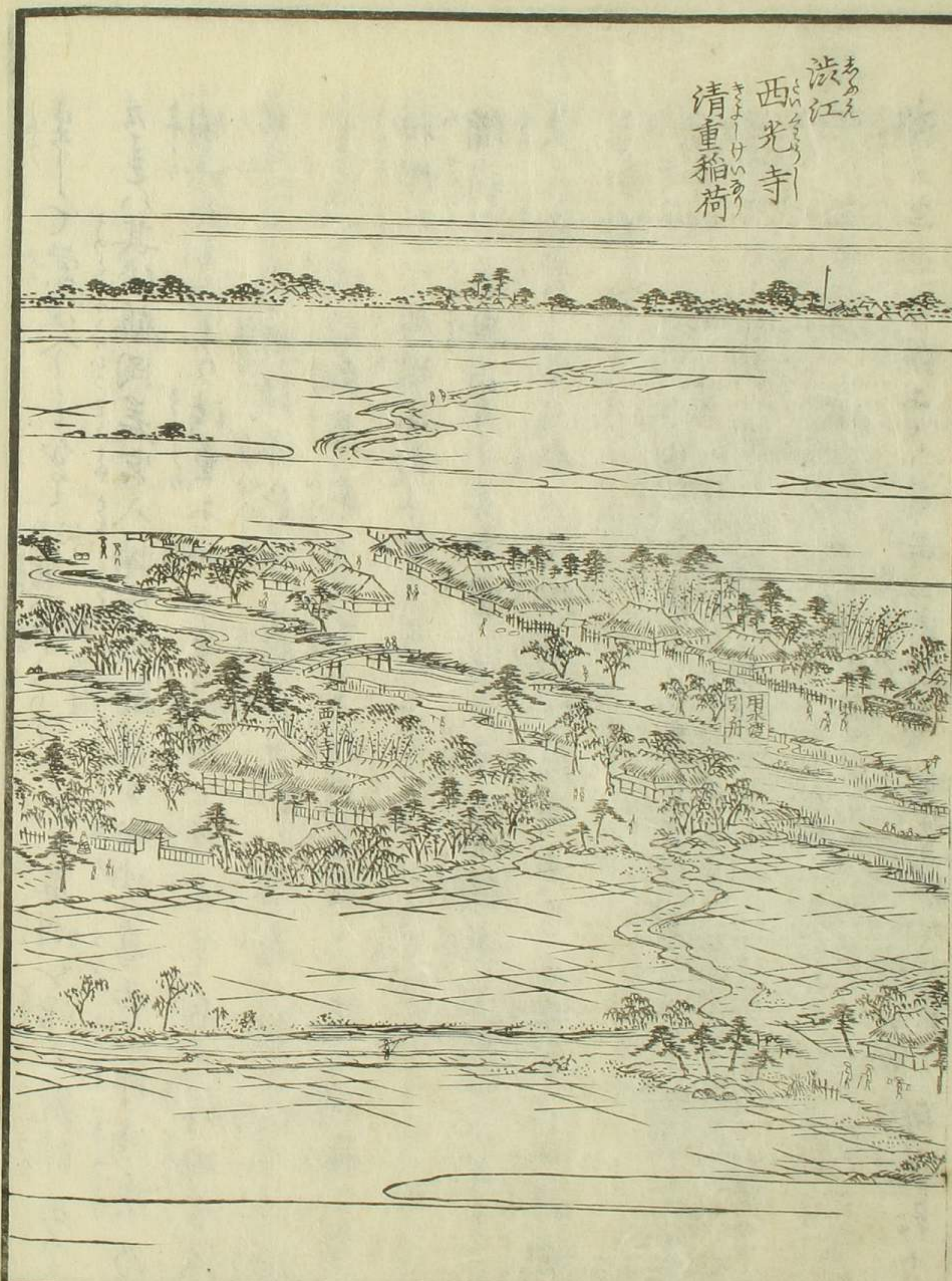
生じて業少くとも  
其榎は樹りて  
竟不奥州と云々  
乃其後鶴岡若宮八幡宮と勸請を此地に葛西三郎清重乃  
願地たふと清重命して社頭と經營せり又神田等  
寄附せり其後年代遠く隔るる障霧ハ軒と侵し淫雨  
と麻を洗ひ春草年々お生れ秋の葛月く小茂を瑞籬ハ崩き  
神指朽て破壊おひてと天正の後 台命ふと伊奈  
備前守再興ありより重初々朱の玉籬光と彰り  
夫も又昔とあり今ハ古松老杉矯々として寥々たる社頭

法華經一部一卷 其文漸く守をりありて卷を圍りて指渡し八九分  
甚奇古あり寺俗の流は頼朝の奉納ありといひつる筆者ハ文覚ありと  
超越山光寺 法江村あり  
小田原北条家の古文書ハ山中内通介  
所領ハ法江の地名と注し加へり  
淨土宗の寺院あり葛西三郎清重 権頭清光の子あり 関基たり





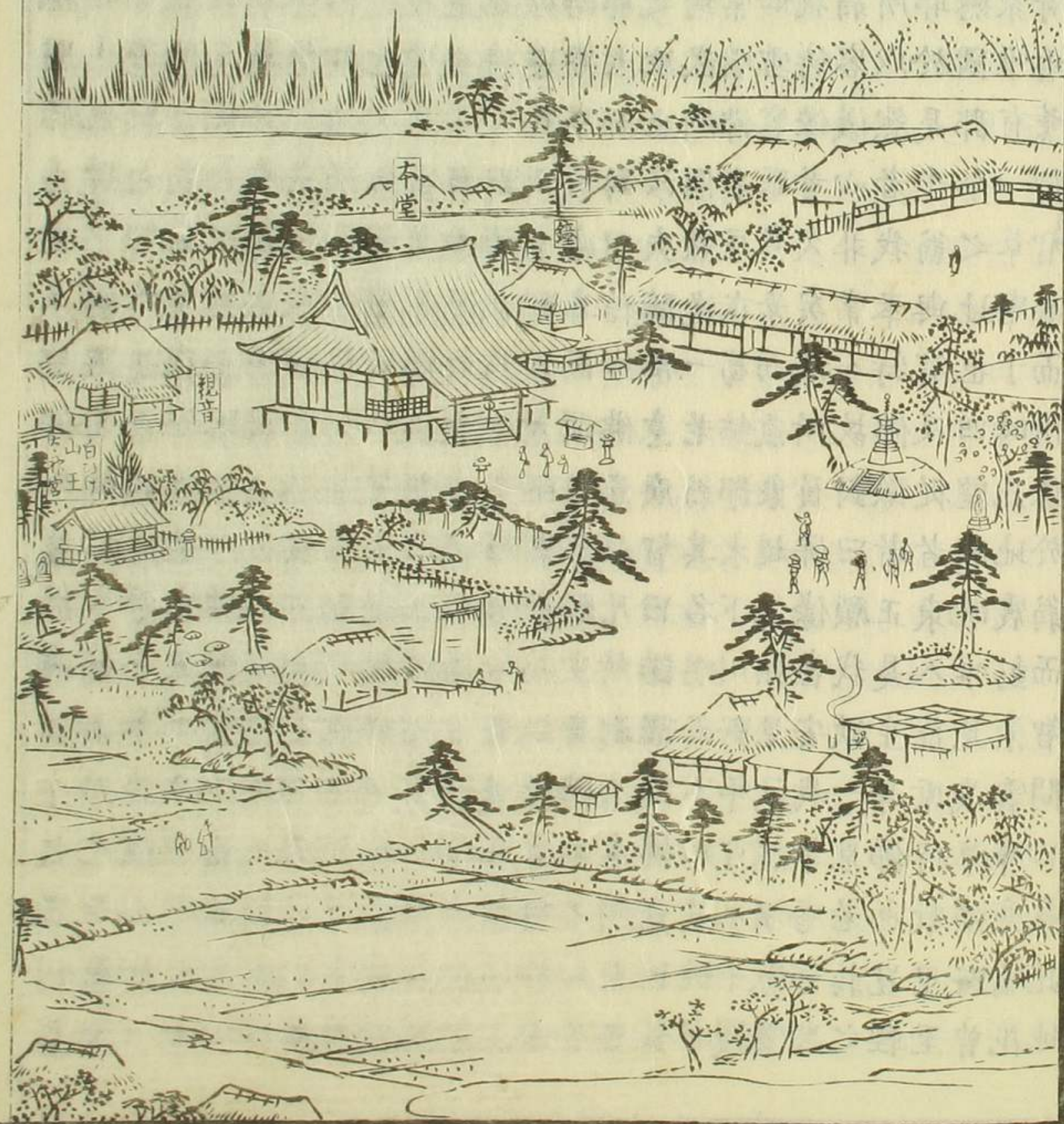
あゑ  
江  
西光寺  
清重稻荷



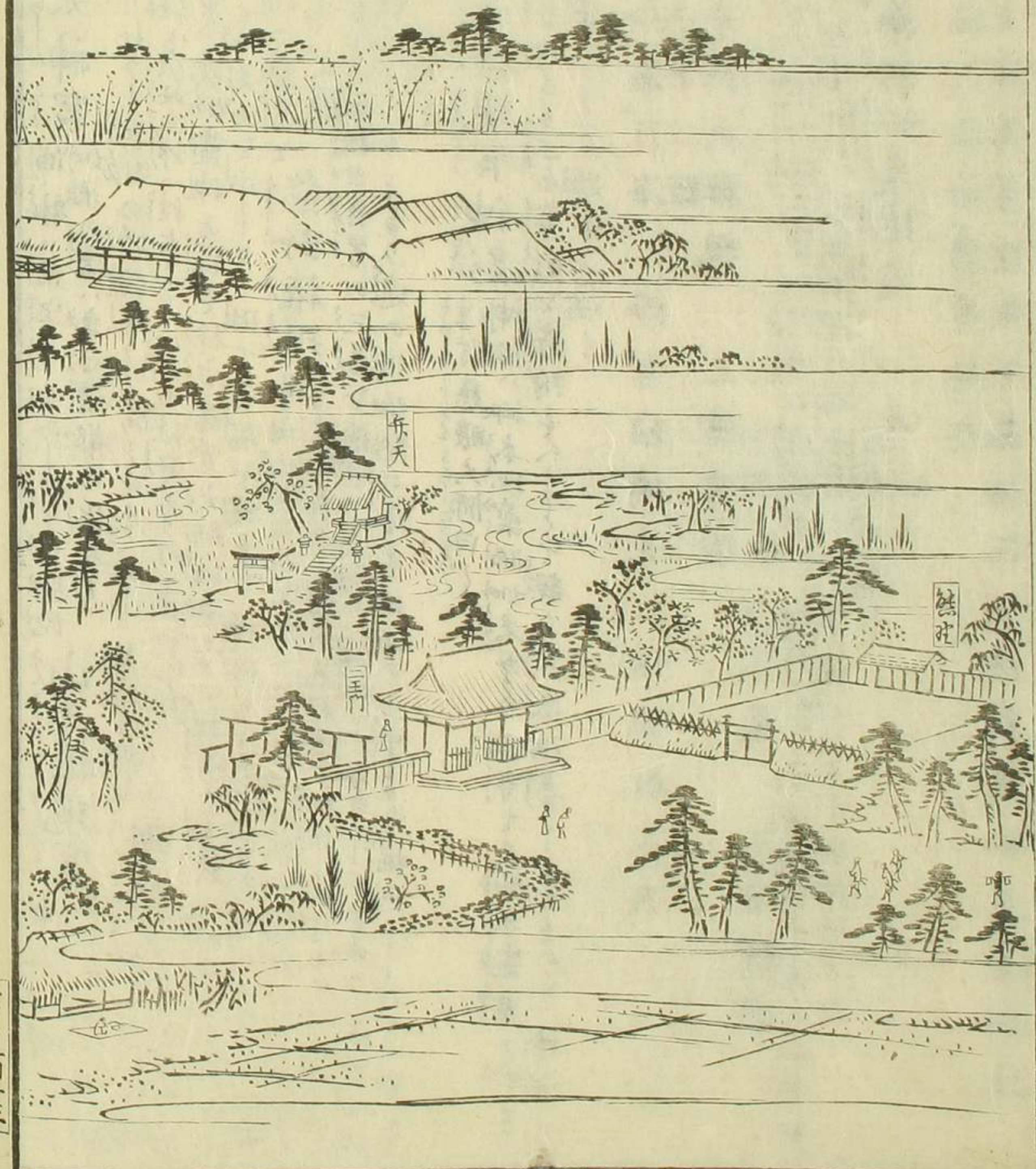




江戸名所記  
 八日なりひみ  
 元三の朝や々  
 うかす本尊  
 の浄前を焚火の  
 あつてまいる  
 人々ありとあり  
 されと遊り今ハ  
 絶えらぬや主人  
 あつてとくり



木下川薬師堂



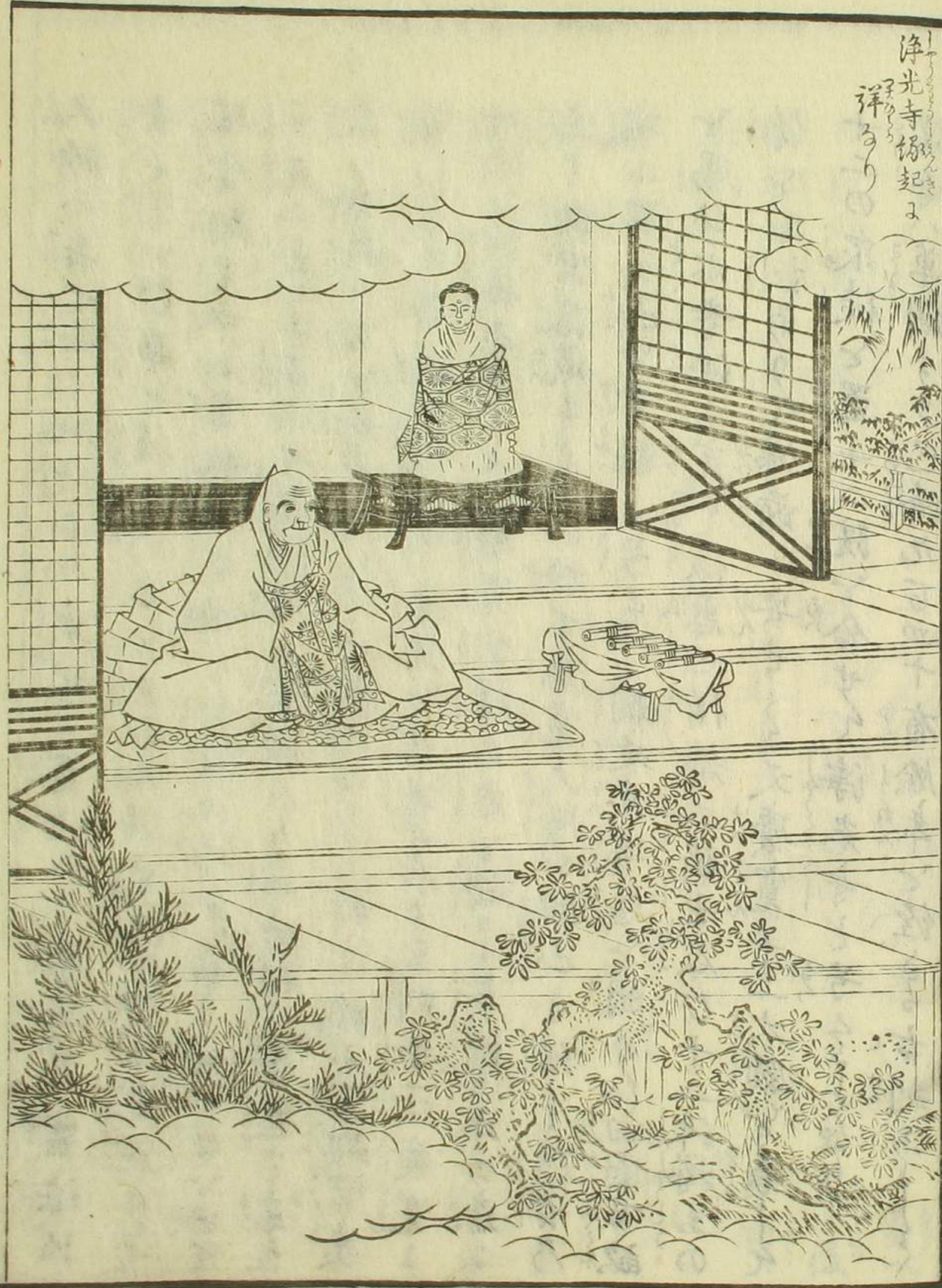
當不時官知語等力等曰宿山龍龍雲尋出靈留傳去識果汝思  
寺動放吏識唱言營獻今草以不能告青臨像淺被村必汝等而建  
居院光及來翁是之供夜庵青動加青龍東彼草現里來等若還伽  
既之覺富而之我此耳夢漸龍垂護龍到北像寺益道此暫能爾藍  
而像大民建莫之地覺或至至頭之日庵忽傳一者俗營合至後如  
告是師等寺曰願伐大人清今而莫吾所然教日多日練心心翁何  
村也思傾於翁也木師告且時聞令有拜起大有矣送若護歸語答  
人此必財此聖師交告曰里時言不一佛瑞師白其天吾此請村曰  
日時靈戮聖者能荆村貴人有已祥言像雲所髮後際若此必民時  
堂覺材力語也企新人人數龍龍自神而青造翁慈追遲地有日緣  
字大自于不翁造為曰寓輩燈形今龍青龍也來覺共歸亦感過未  
未師刻時虛欲營靈我草捧奇隱以聞龍現言曰大深傳好應日熟  
成或不庵師去我場欲庵珍瑞覺神之猶雲已東師信吾建也吾汝  
雖時動中其告等則建子膳者大龍吾現中形北東誓語練我已且  
然在明有人衆誓不寺等而其師為欲在覺隱有方首語若有得還  
吾淺王尺也曰努亦於盍至此為護建覺大慈靈行自畢後西安去  
志草像餘於後力宜此餉問謂吉伽寺大師覺地化是凌時州靈於  
在寺今靈此時村乎汝焉其乎徵藍於師潛大吾之靈空有之像是  
弘或堂木合有人村等故故其即神此向出師安時感而善行自智  
通時西時郡善亦人合我對夜名青神瑞寺便置暫溢西知未今止

紛無則附居謂翁髮是東靈何智是天像大我像之故尊乘佛無布  
亂人下之處此曰白何還應處而日明腰師當告日再是止像量金  
奇家總耶所翁我如常到之耶語欲此見日行日佛刻也觀者之祇  
香唯國於以容待雪唱武地大夢還時今像也如像藥其院傳生園  
薰有郡是然儀像容佛州也師事野下不已大汝已師後自教也始  
郁一今乎者心者眼名偶汝對智州野拜靈師所成佛大刻大肆焉  
智草之翁我非久麀居然夫曰感告國像異俄念但像師等師下爾  
喜庵地與奉常矣素在逢隨信喜別大腰不覺我未今思身所總來  
而于也智特人汝而葛一佛知而耳慈者煩時欲琢青念藥造國佛  
附時四及佛故所氣飾老意佛問大寺蓋復四利彫龍彫師也葛像  
像此望從像對負象郡翁廣意曰師有由彫更益像山刻佛初飾伽  
於地瞻者者曰佛超木其智非然默釋之乃也東腰之一像延郡藍  
翁震眺東正願像凡下名曰凡則然廣也止便國其本佛安曆青徧  
而動唯入是我當相川唱諾所生而智而因起之夜尊像置七龍滿  
智紫見荒生欲安見野翁謹測身知者大之拜衆大是當之年山三  
問雲茂原身一我欣年不隨只佛佛來師自像生師也化今於淨千  
日降草行佛見草然可知佛東也意在不以感明夢大益中叡光之  
我垂曠數也老庵傾九其意州不附叡知錦歎且所師東堂山寺界  
此瑞野里豈翁智慰十姓因自知於山便綉恭有刻彫國之創藥利  
地花曾至輕之思唱鬚字負有安廣至到纏敬便佛刻以本一師益

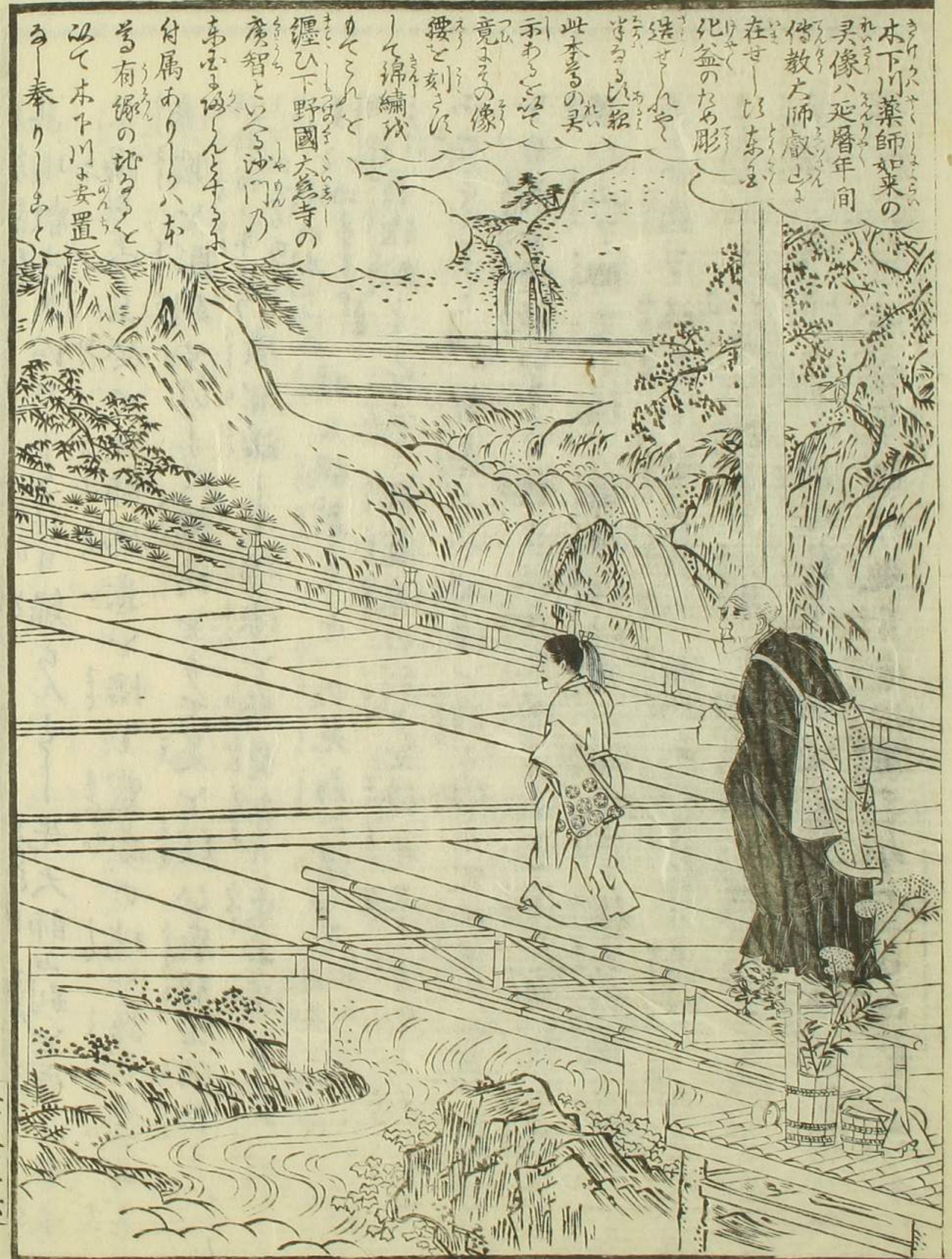
所期未得此山附日當去他日再來耳又告弟  
顯密之教三其志積萬年觀十直視忽然明淨或近國遠  
至營觀一如其志積萬年觀十直視忽然明淨或近國遠  
造俗有成一日有人積萬年觀十直視忽然明淨或近國遠  
視道起堂見五色不穠光或佛小佛未像或佛多像或  
境見赤僧或有全使徹問其本佛未像或佛多像或  
善薩聖友教人使徹問其本佛未像或佛多像或  
重罪至誠遂得見種種不悔或佛未像或佛多像或  
地殷重瑞應賜田數百畝充供焉其後源乎血灑朝  
廷自刻是也光表十是鎮願置佛之前徒合一善信  
都二神是也光表十是鎮願置佛之前徒合一善信  
叙院名曰淨變懼其實是本鎮願置佛之前徒合一善信  
嘉曆二年夏六月十五日住持沙門義純謹書  
無

本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の爲叡山小於て  
藥師佛と彫刻を漸字の頃一夜此像大師の爰告て曰く  
汝り念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんといひ明旦便あり  
我西より一と大師誓き爰覺ぬ然も明旦下野國大慈寺の廣智

其頃叡山ありし此日歸らんと先大師別と告んを來  
了謁をある於て大師佛意と悟り靈夢の瑞と語り竟ふ其  
像腰と彫刻せしめて錦綉とめて是と纏ひ廣智の附屬を  
佛神僅小半より廣智諾して佛像と眷屬なり東小還り武剛  
上と撰まるの今の本下川の時は偶然とて一の老翁小逢へ  
到る地あるなり時又偶然とて一の老翁小逢へ  
明神翁然とて云く我靈像の到るを待り久しよあり我茶庵  
小安をへると云智喜んで彼像と翁は附一又此地小伽藍と建ひ  
と告翁云時縁の熟せし汝且還り去ま依て廣智を此と  
思ひ止り郷里小歸る爾後翁村民小語て云く後善知識ありて必  
あふ小來り練若と當ん我今西州小あり若歸り來り遅  
うんあを此語と傳へて云畢り空と凌ぐ西小去まり村里の道俗  
天際と見送り共々深信替首を其後慈覺大師東國化導の時  
武剛小到り暫淺草寺の觀音堂小留り一日白髮の翁來て



浄光寺協起  
 詳るり



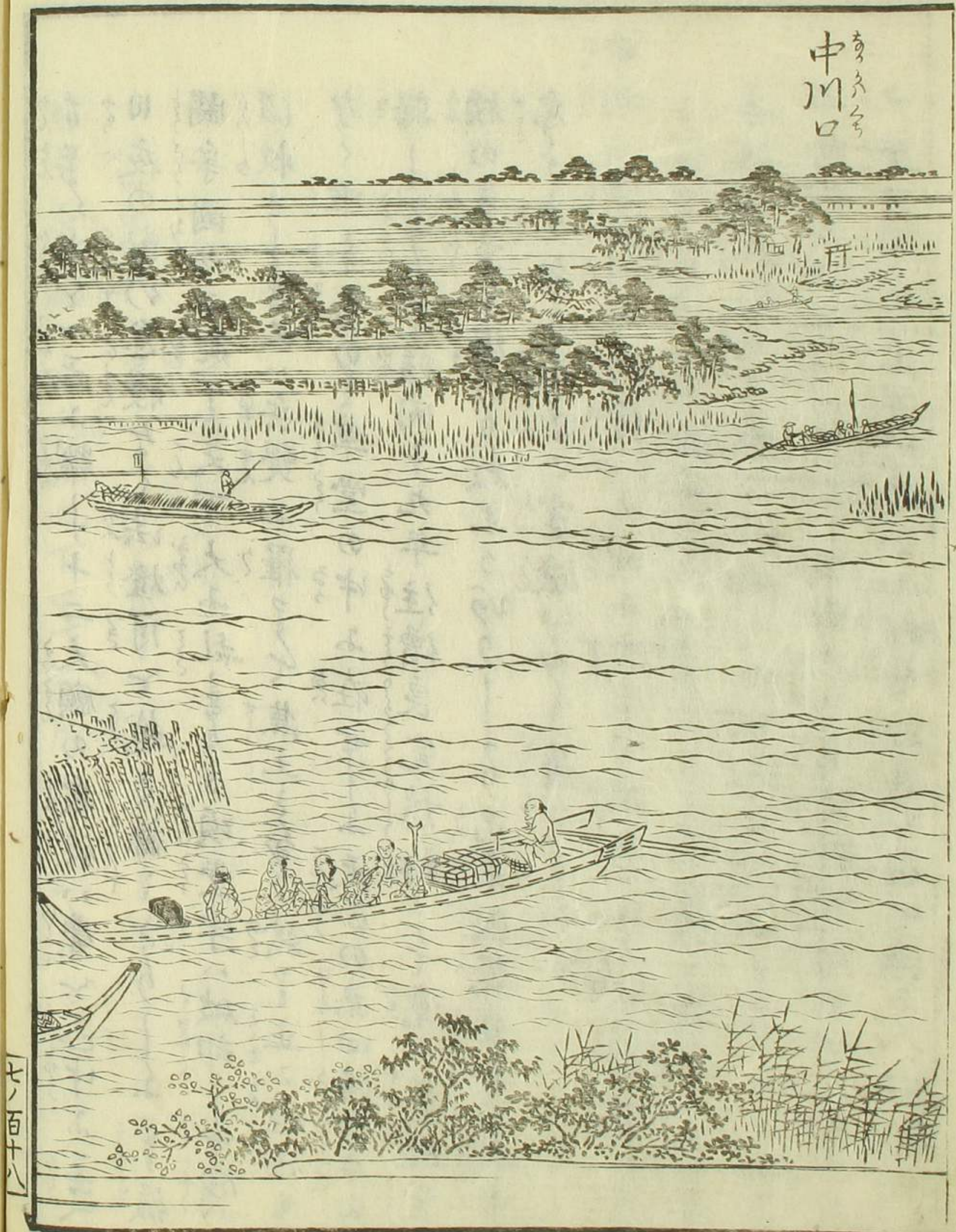
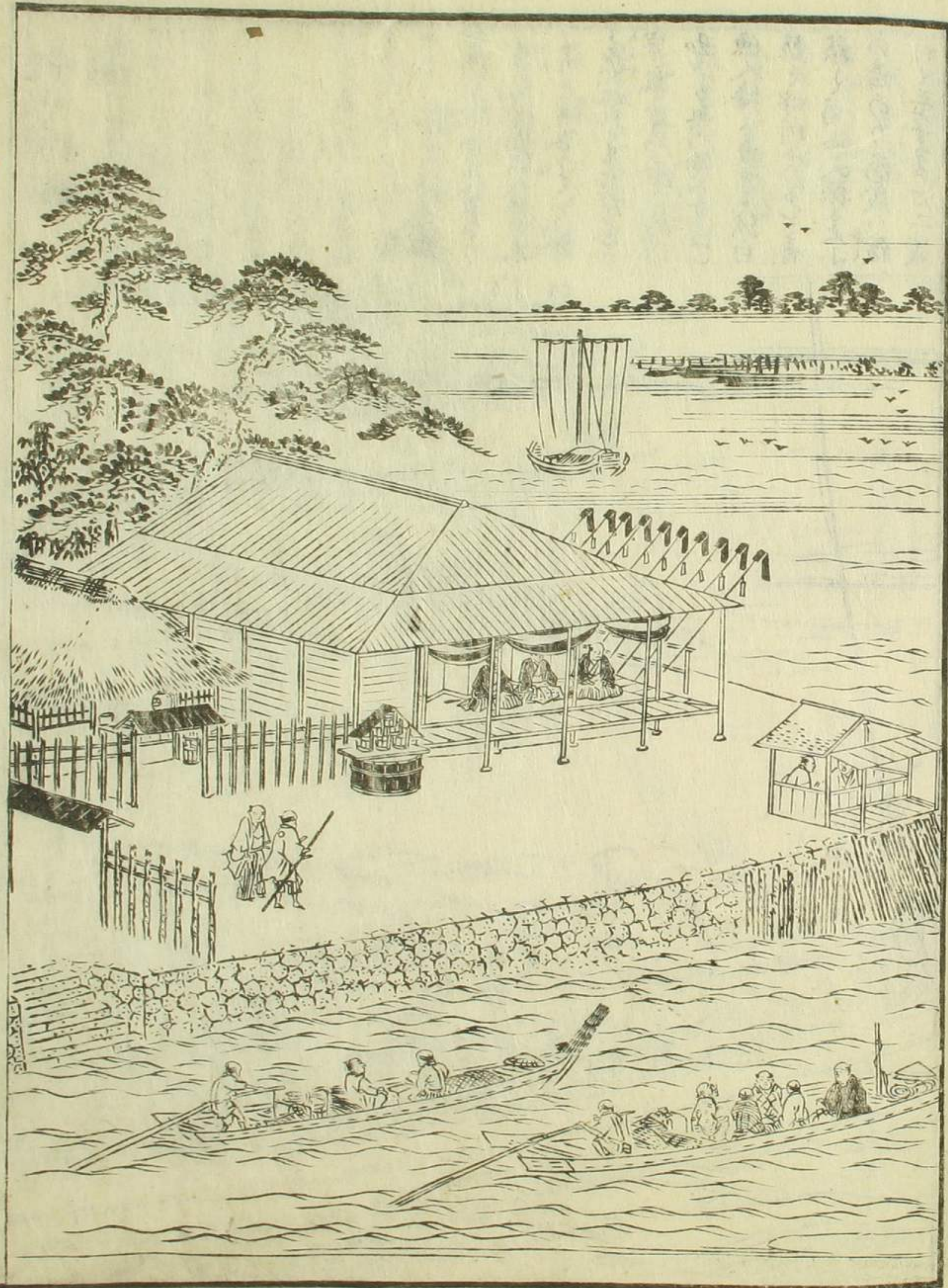
木下川華師如来の  
 灵像ハ延暦年間  
 僧教大師獻じ  
 在せしにあり  
 化盆のたぬ彫  
 造らんや  
 此本もの  
 示ありて  
 竟よその像  
 像と刻  
 して綿繡  
 りてこれ  
 纏ひ下野國大倉寺の  
 彦智といふ沙門乃  
 ちよも海くんとす  
 付属ありしハ本  
 寺有像の地を  
 以て木下川に安置  
 る一奉り

大師不告て云く此所より東北に靈地あり藥師乃靈像以  
安まるといひ畢て後其方と失ふ大師東北と望み忽然として  
瑞雲起る中小青龍現を依て奇異の思ひを著し諸小寺と出  
て元おむる果して藥師佛の靈像あり此時村人等集り來り  
前の唱翁り言と告大師とて其人ありと稱し終に合郡官吏  
及び富民等財を傾けし寺院と建せんとす則弟子慶寛は  
此地と附屬ありし慶寛堂構の志を勵し貞觀二年の春に  
至り諸堂落成を以て於て慈覺大師と岡山と稱し性古乃  
瑞小園と山と青龍と号す朝廷其瑞應と聞ゆひ田園百畝  
を賜ひ永寺供は充て後惠心僧都二脇士及び十二律將士の  
像と彫刻ありて佛前にお安せし又慶寛十二大願と表して  
十二の衆徒と置十二院と合せて淨光寺と号するあり  
當寺の草創より己降九百四十有餘年と經る古刹あり

本寺の光と一天の耀し十二大願の衆徒は薨て山中にお坐へ  
日夜の勤は怠慢なく法燈月と越え赫々として其後  
鬪争國々不起り天下大亂まらざる頃堂宇は破却し寺傾は  
没せし又兵燹お罹りて焦土となり残る止る住僧も  
なく唯本寺の草堂の中にお在せし天正の末四海昌平に  
歸り來り後同十九年住僧良完慈訴して竟に某師堂  
願の朱章を揚りぬ志ありしより己來國家泰平の祈念  
念ふ多し本寺の靈驗いよ著しあり

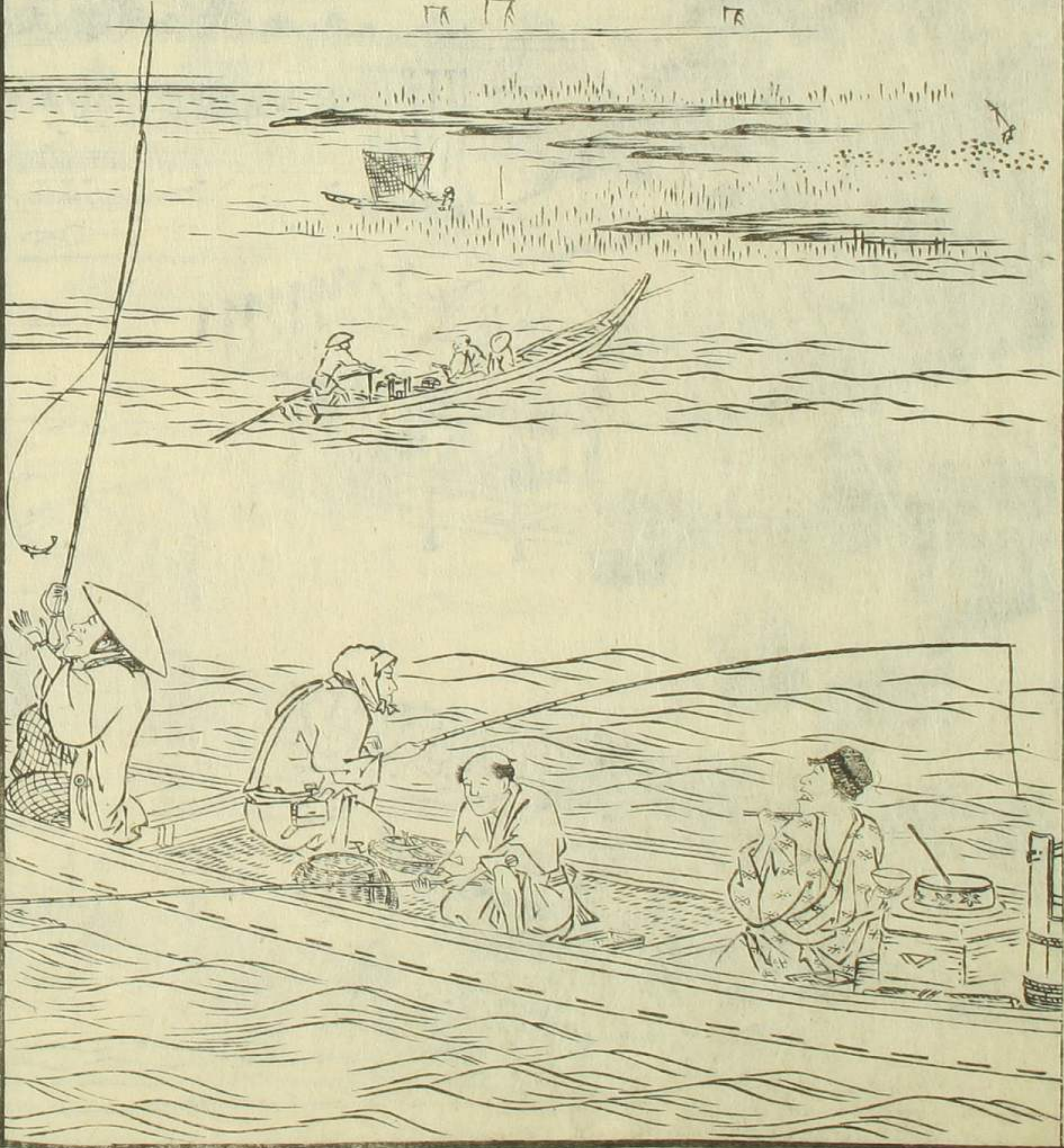
中川 隅田川と利根川の間に夾きて流るる中川の号あり  
とて荒川の分流熊谷の辺りよりして遠く埼玉と足立  
と北西郡の合と流を利根川の分流も川俣よりして  
二水接り候の辺り合版塚大谷龜有新宿等の地にお添へ青  
戸奥戸平井木下川及び小村井逆井と經て海にお入



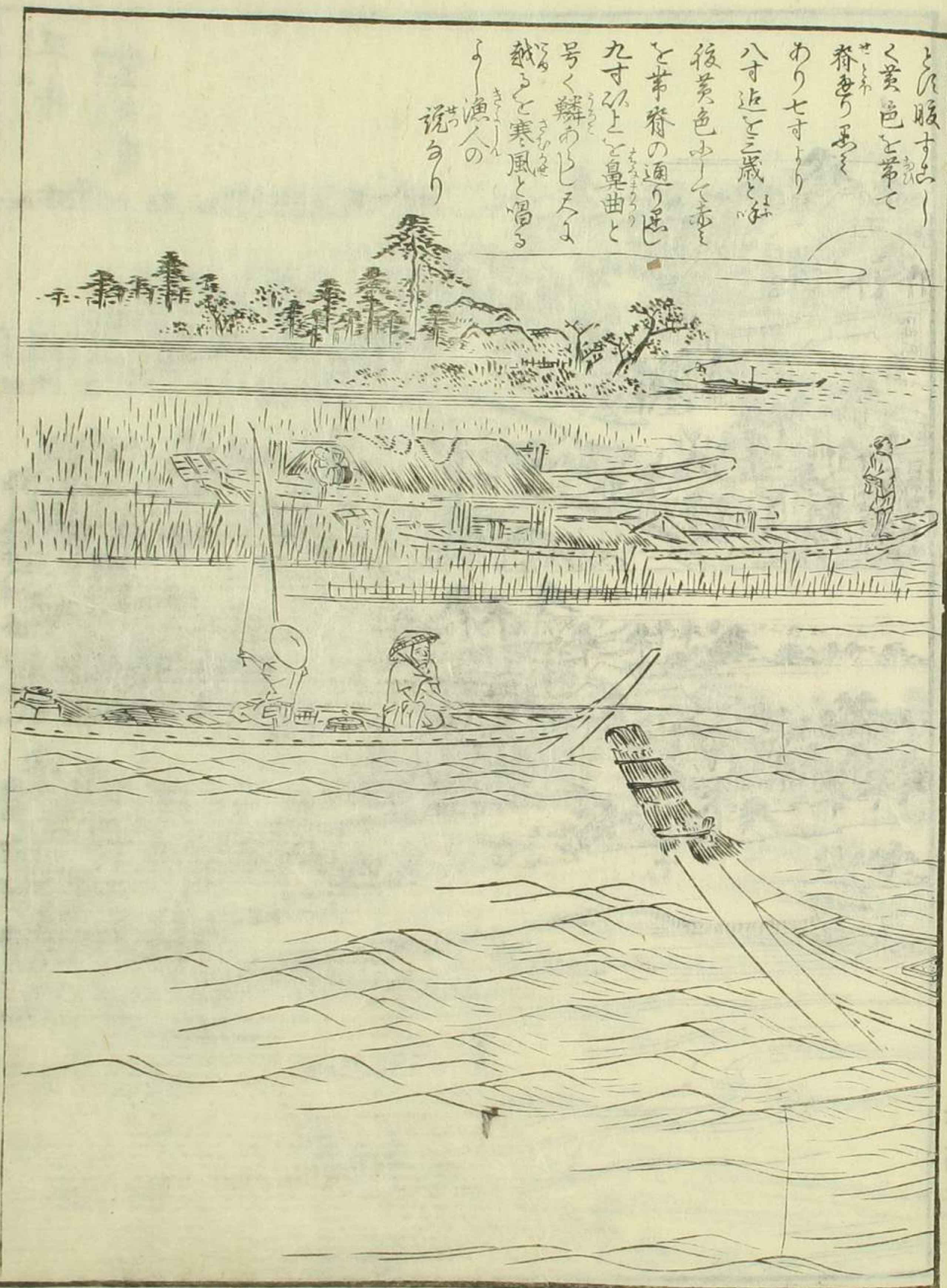


中川釣鱧

春鱧三月の末より  
四月小入るまで春  
鱧と云ふ寛文のは南総  
伍大力の船頭仁壽と  
まゝと云ふ岩崎兵衛と  
ゆゑ人は是れ今岩崎流  
といふ別は人子始  
りてはより後春鱧  
と釣るも世お盛なり  
と云秋鱧八月の末  
より九月の末と節  
と云はれども十月より  
寒氣おつれば沖へ  
出るる川釣不幸は  
漁人海へ産するは白  
鱧と呼川おのると青  
鱧と唱ふは鱧は太  
の差ありぬ歳は後  
白く五六寸と二歳

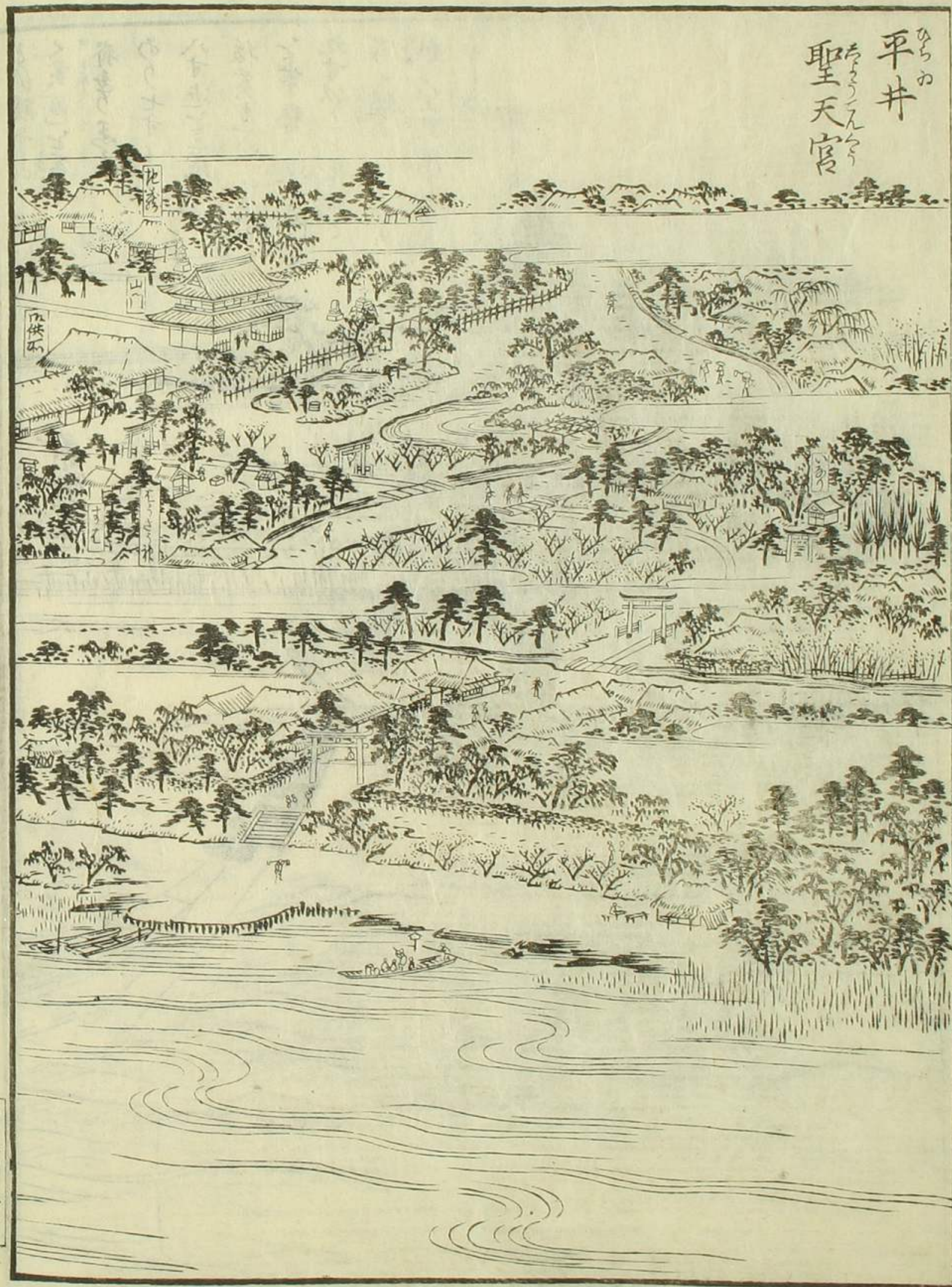


と云暖すは  
く黄色と帯て  
脊よりあき  
わり七寸より  
八寸迄と二歳と  
後黄色ゆくと赤  
と帯脊の通り色  
九寸以上と鼻曲と  
号く鱧のじとよ  
熱くと寒風と唱る  
漁人の  
説り





七百二十



上と古根根川とより遊古水戸黄門光圀の水府入江の邊此中川乃  
中川と命せしむるなり

中川やほろろひてもあら月 嵐雪

立石 立石村五方山南藏院とつる真言宗の寺境あり地

上へ顕まゝ不終又壹尺まゝあり土人相傳へく石根地

中小入る其際まゝとありはとあり石質弱ありて色世間

小秘まゝ鞍馬石小似たり此石寒氣と帯まはるかかると欠

損まゝれども春暖の氣と得る時ハ又元の如くと云ま

近々四五箇村の名とせしう分たるとあり

熊野権現祠 同境内良の隅あり今日地と失ふる鎮座乃

年歴等と詳しせまると神躰ハ一箇の靈石なり長二尺八寸

本より二尺たり未だ六寸あり 其餘武剛練馬の石神井村石神井

社及び多摩郡阿佐り谷神明等の神躰乃靈石何れも

其形相似

披し神まふ皇孫の降りし時諸部の神の佩せる頭槌劔あり

日照山普賢寺 上千葉村あり新義真言宗なり本多薬師

如来ハ佛工春日の作なり弘安年間法空阿闍梨開基に

地名あり當寺食邑の田跡あり

境内ハ葛西六郎と

人の墳墓あり

披し葛西三郎清重の氏族なり東鑑は建曆三年癸酉五月三日和田左衛門

尉義盛兵を起し將軍家及び執權義時の事とあり茶下に葛西

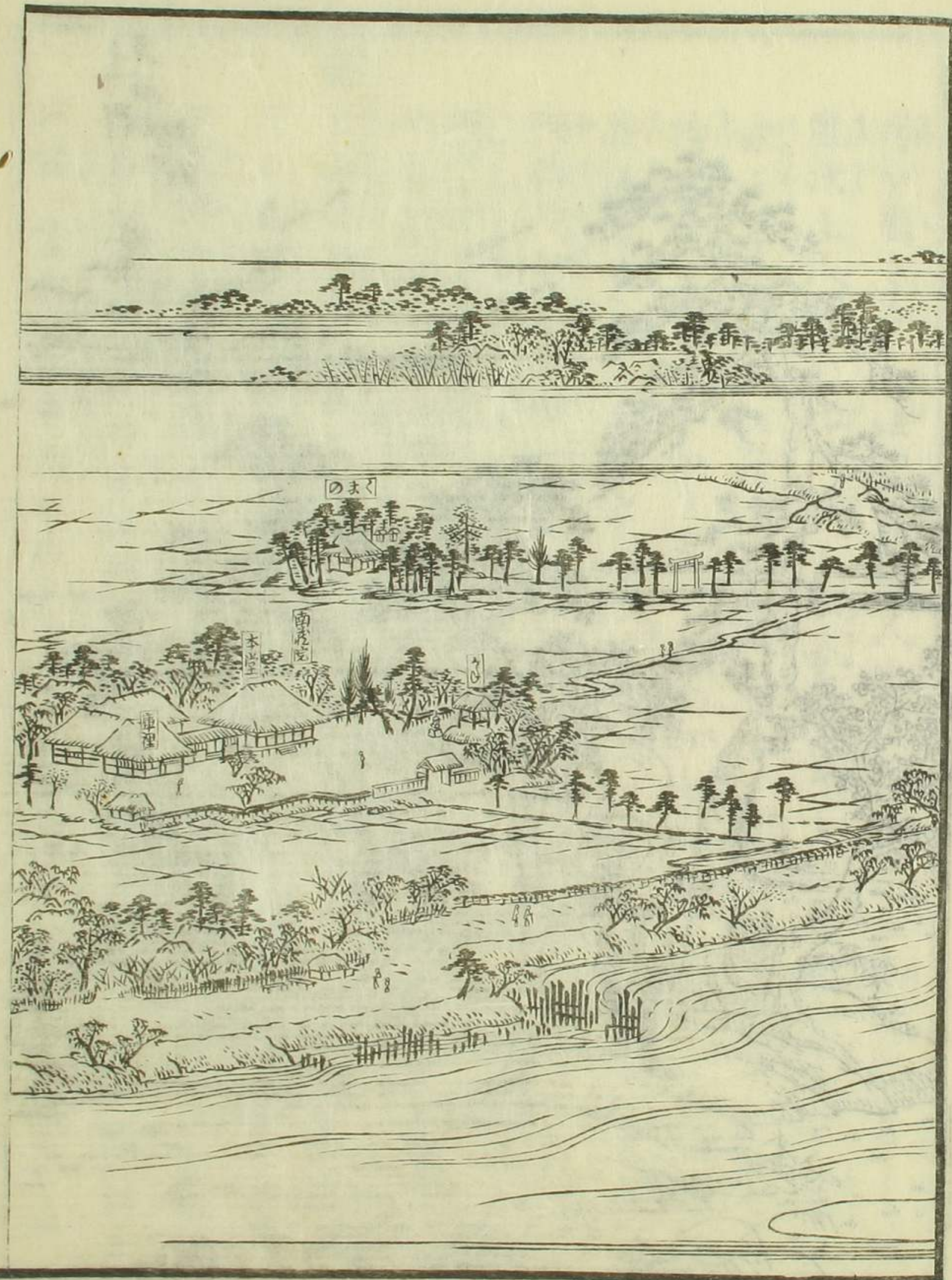
六郎とつる名をせし武藏國の住人と注せり恐らく此人なり

真光山善通寺 逆井渡口より八九町東の方東小松川村より

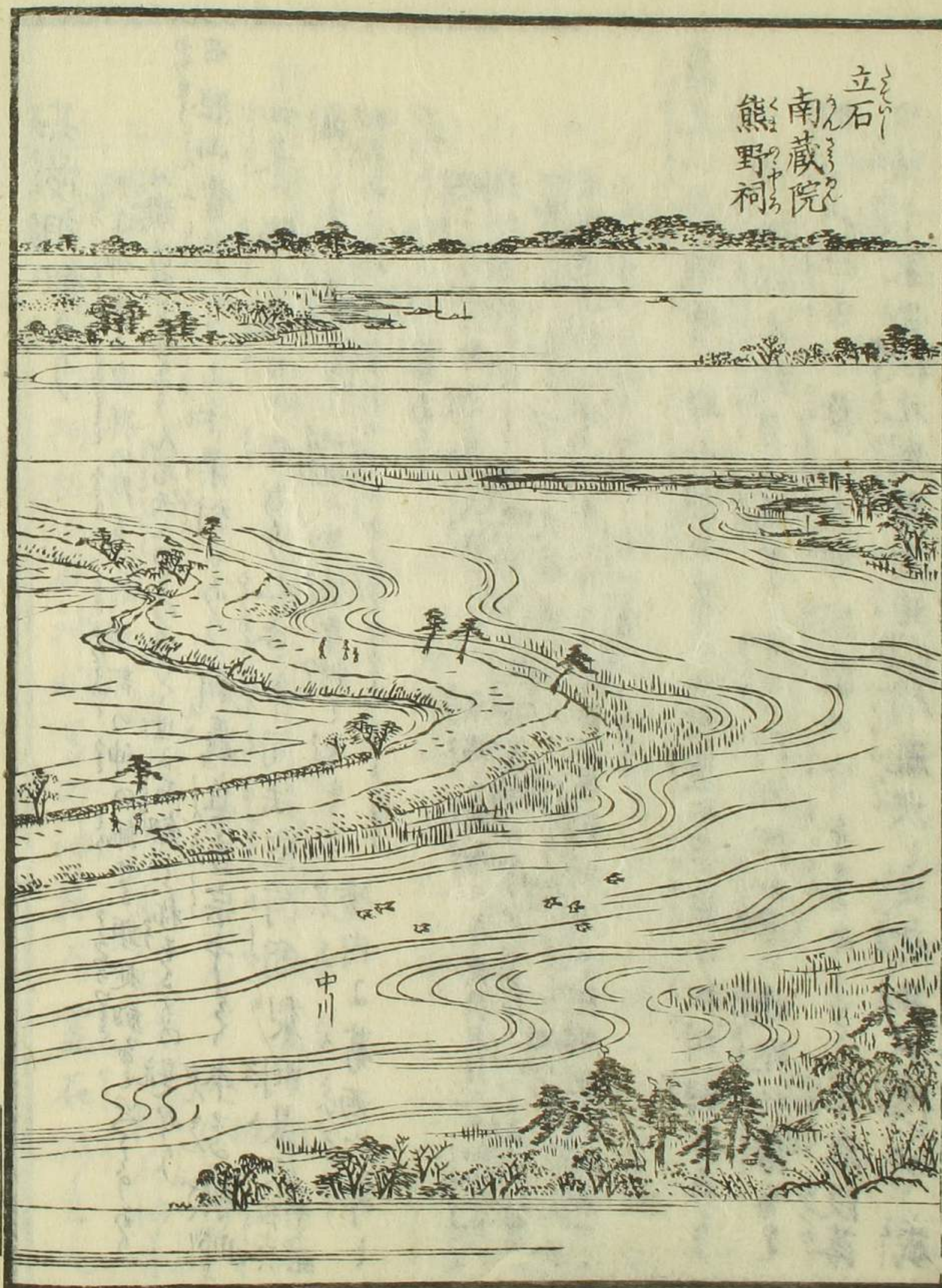
一向宗西本願寺に属せり本寺阿弥陀如来ハ来迎の像あり

相傳へ往古千葉介太郎宗胤の守本寺あり

の後家臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是を傳へる歳



立石  
南蔵院  
熊野祠



中川

五石村  
五石



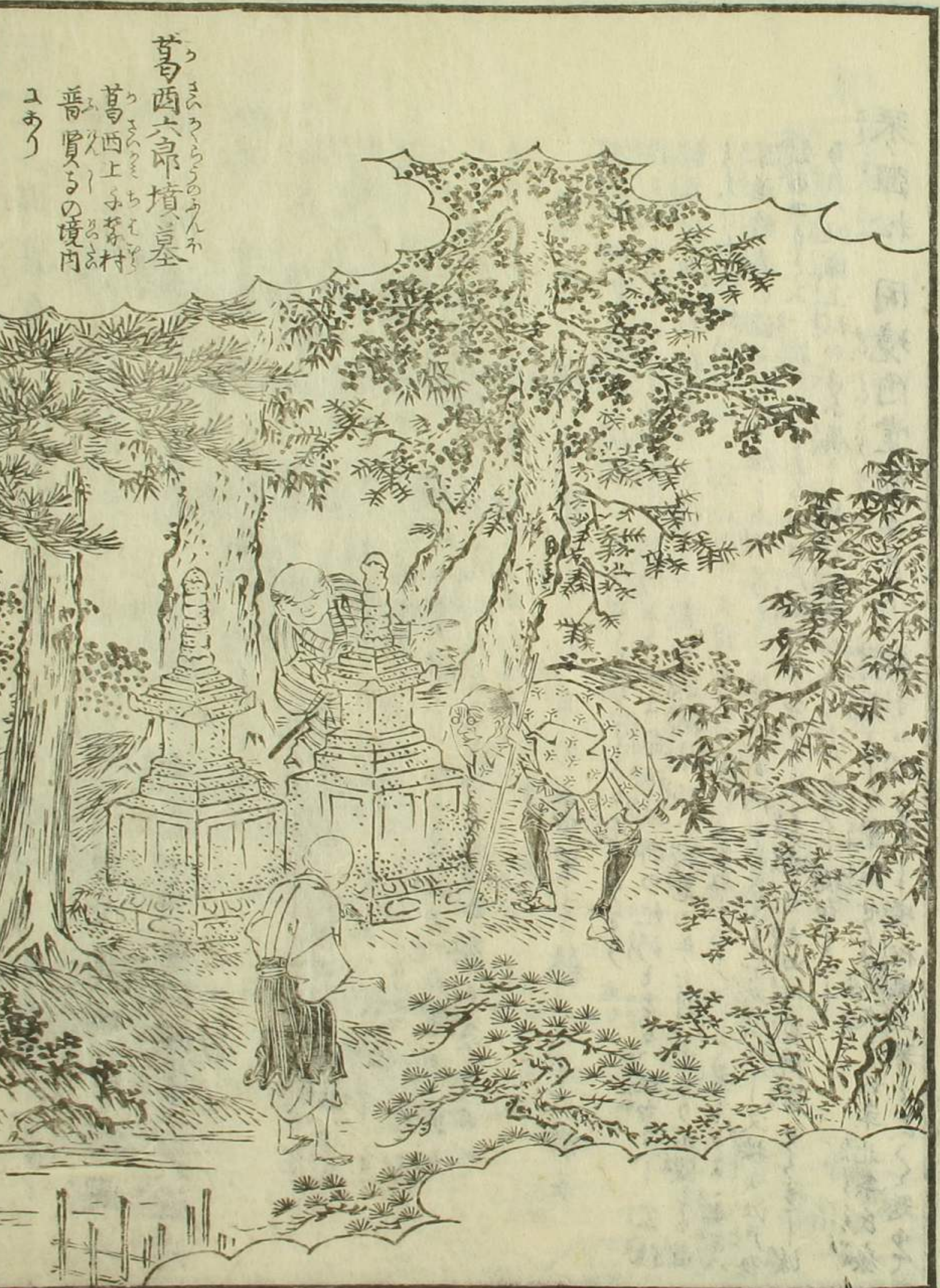
月と歴より後親鸞上人胤次り家小止宿せらまゝ一頃  
胤次上人の宗化小帰一室と嘗て此本寺と安す然も  
永正年間兵火罹りて堂宇悉く焦土となりしうと本寺の  
持退て恙申しとあり天下承平の時小住り終又一室を闢く  
善通寺と号くといひ  
秋元刑部左衛門の子孫今も此村の中は四有  
余軒存してのつても善寺の門徒なりといふ  
阿弥陀如来画像一幅  
中将姫装束なりといふ物地は穉の縁ありて都首の  
八日より同十日迄此像と掛く諸人は扱せむ注古  
賊難小逢といふも威風のありて失くすことあり  
十字名號一幅  
親鸞上人の真筆あり昔上人胤次り家小宿せらまゝ一室  
此十字と書て與へらまゝといひ今も傍へて善寺あり  
醫王山妙音寺 東一江村小住り真言宗ありて建久元年秀榮  
上人開創する所の精舎あり阿弥陀如来と本尊と此善寺小安置  
の薬師如来ハ立像ありて佛工春日の彫造なりと云傳人姓古飯野  
安房守某あり人の念持佛ありて靈威の尊像ありと云辨成天  
此宮ハ堂前池の中島ありて寺祀小寶治元年丁未勅請すと云

賓頭盧尊者像

堂中小安置を寺僧侍へて  
佛工春日の作ありとあり  
言一尺ありわりの荒木造り  
わけて容貌甚異相あり



本覚山妙勝寺 西二の江村古川の通りあり日蓮宗にして中山  
の一蔵寺葛西の觸頭あり 弘安年間 或ハ徳治二年 日尚上人乃  
草創ありて宗祖大士の像、日祐上人の作なり 日祐上人、中山の第  
三祖あり延元年間  
宗法盛なり、頭一夜宗祖上人微妙の音声ありて讀經ありて覺る、後自ら  
海中感得の影像と摸造りて、用眼供養し、日尚上人、附屬あり、則基坐小、音趣と  
注し置り、以て世俗讀經の高祖大士を稱せり、夫より後、修飾と加ふる毎、中山より  
今、日尚上人、尚寺開創の主なり、平氏の來、舟ありと云、公、安七年甲申、或ハ正應年乙  
水神宮、日尚上人、尚寺開創の主なり、平氏の來、舟ありと云、公、安七年甲申、或ハ正應年乙  
漁人五郎、何某、舟の助け、舟に其來と用て、自通家、何某、舟ありと云、公、安七年甲申、或ハ正應年乙  
傍、小草卷とのと、廣宣流布の志、頗かり、此水神宮、日尚上人、初洞舟、乘り、此地、妙見山の  
漂蕩あり、頭深く水神、祈誓し、波浪の難と適き、報恩のため、此本寺と周刻し  
日尚上人の慈眼とて、後不退、一斬の法味とて、まつらるゝとあり

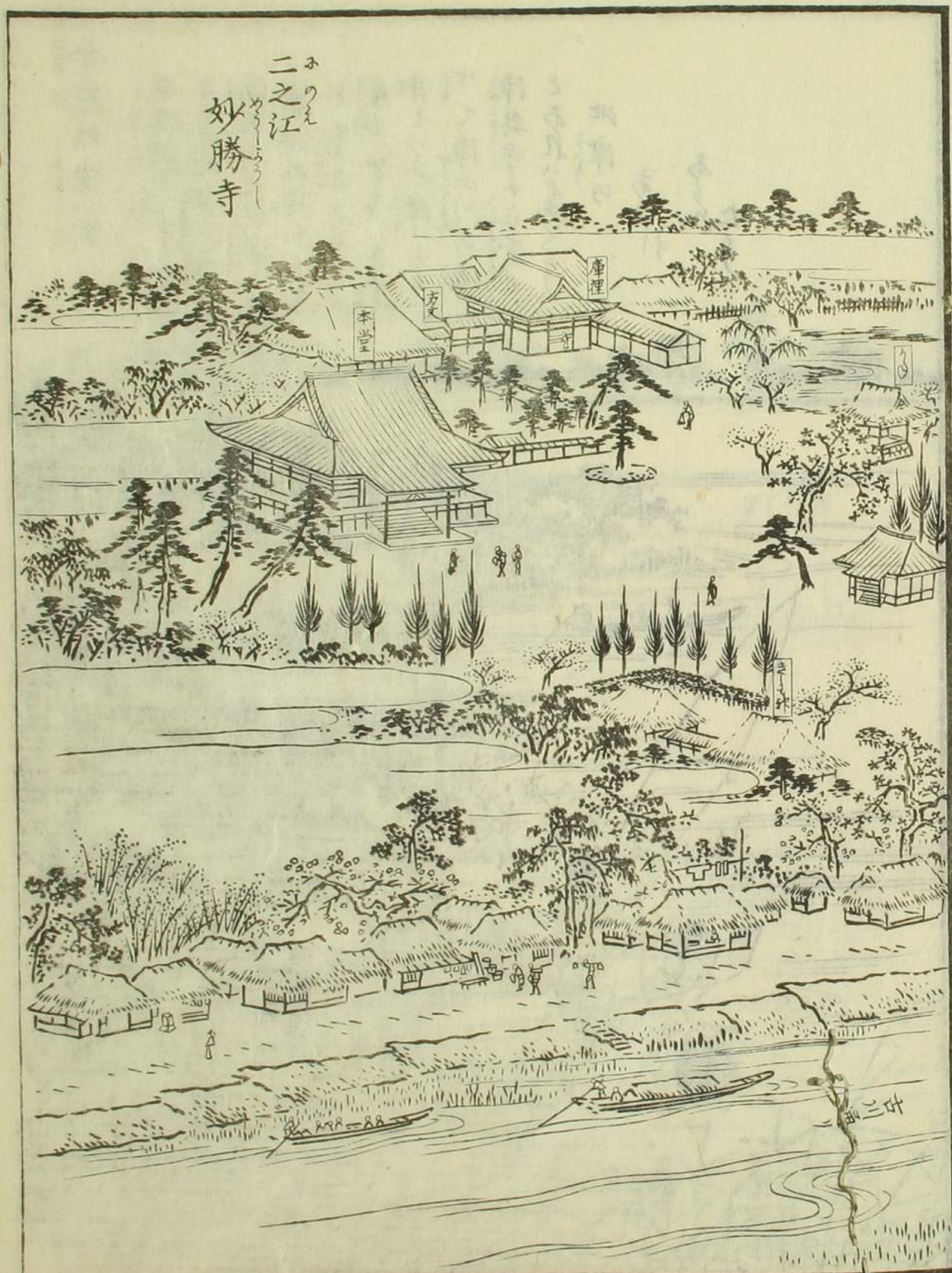


葛西六郎墳墓  
葛西上子村  
普賢の境内  
あり



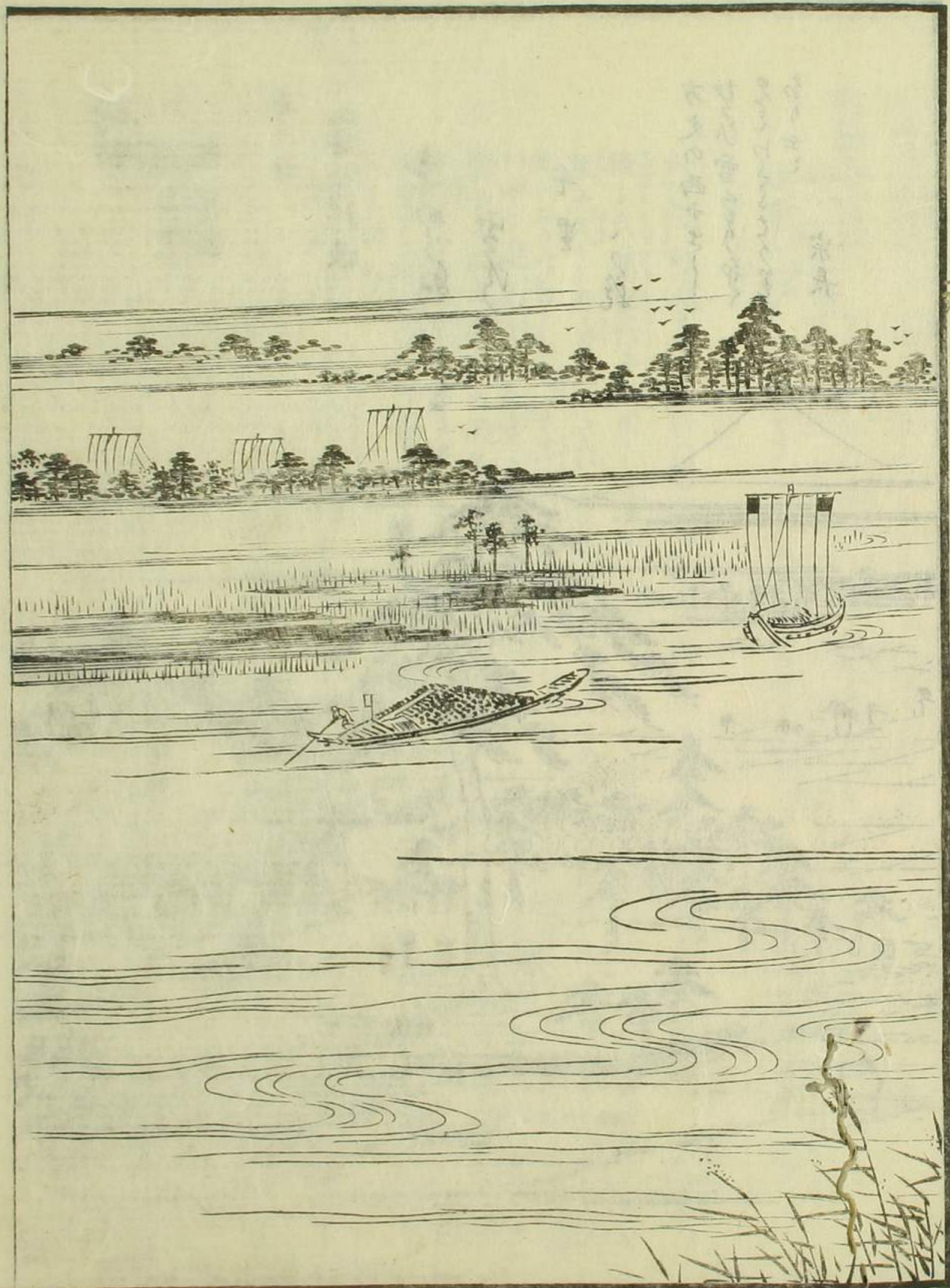


二之江  
妙勝寺



二の江より今井  
舟場桑のあり  
小産する海苔と  
世に著る西海苔  
と称す本草に  
所謂紫菜の類  
中へ流草海苔  
も異あり





今井の津頭

柴屋軒宗長永正六年の記行東土産隅田川の河舟よち葛西の府のちを半日とくり葭芦を志のき今井とつ津より下り浄土門の寺浄真寺に立ちあてとあれはとく

此津の

あり

あれ  
たり





天文十五年秋小田原の  
 北條左京大夫氏康御  
 野小鷹狩の時葛西の  
 浄真寺に一夜のやまを  
 とらわれ松風へ琴を  
 つく和奇を題  
 かく詠せし  
 武蔵野  
 紀初  
 なる

松風乃

吹こゑ

きけ



七百九

北條氏康

孫

まを

こゝろ

きけ

よ



帝

同十日迄佛龕を削き観音上人の鏡池本堂の後にあり止人自ら肖像を造りたる時此池は面影とす架装懸松同傍にあり旧樹ハ太子堂御影堂の前の於にあり釋天王柴又村經栄山題經寺安置御影堂は相對せり聖徳太子の靈像を安んず太子自ら作らせり云傳はく毎歳二月廿日縁あり年間の草創なり

縁起云當寺第九世日敬師在住の頃堂宇大に破壊を師深く是を歎き普く四方を行乞し再興の志を勵し終に其堂舎を造改んとする時梁上より此板を得たり旧當寺は高祖大士手刻の祈禱本と稱するものあり由云傳へし

此時に至りて空しくぬき之を則本とせしむる長二尺寺厚サ五分あり梨板なり片面中央は首題あり左右は両菩薩又病厭消滅等の数字を刻し其下は五月日とあり大士の号あり花押と印せり又片面は帝親天王の影像あり右の手に鉢と持し左の手に開きく怒の相とあり是除穢延壽の本を惡魔降伏の意を容たり信統の輩は是を御影堂と稱す

早稲田大学図書館

011688985015